

27  
1023

乃木大將の面影

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始

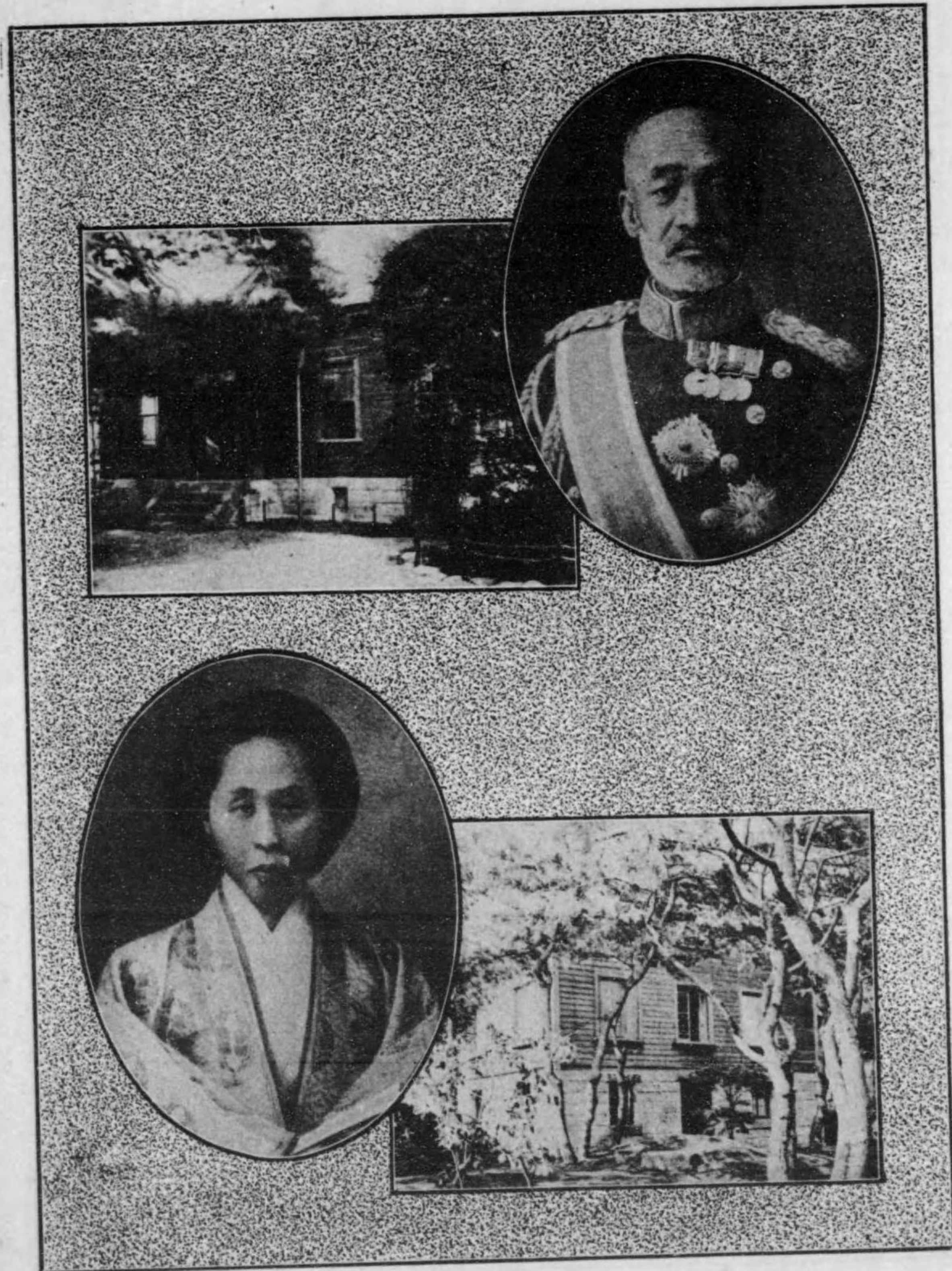


乃木大将の面影

[Blank label]

[Blank label]

327-1023



乃木大将御妻並赤坂新町大将の舊邸

明治天皇の御登遐乃木大將の殉死、昨日の如くに思ふて居ました  
が、烏兔匆匆早くも爰に五ヶ年を経過いたしました、誠に夢の如  
くに感じられます。

明治天皇英邁の資を以て夙に維新の宏謨を遂行せさせ給ひ、國運  
隆々國體の宣暢と共に稜威いやちこに、申すも畏きことながら  
に其御聖徳を拜すれば拜するほど、いよ／＼高き御光と深き御  
を仰き奉りて盡ざるところであります。

乃木大將が純忠至誠造次顛沛の間も其心を離れざりし奉公の一念  
は、遂に 天皇の崩御に感激して是に殉じ、壯烈の最後を遂ぐる  
に至られました、實に大將が其一生を國家に捧げ、軍職に在ては



正運 5  
大實 9  
内交

忠節を抽て、學習院長としては子弟の教育に赤誠を盡し、文に武に其偉勳の赫耀たること、今更めて申すまでもなく、且又一私人としての性格頗る謹嚴清廉でありまして、自己に奉すること極めて薄く、公共に對すること甚だ厚く、所謂躬行實踐終始一貫生ては國民の儀表となり、死しては萬世の典型となりて、世人の欽仰措かざる所であります。今爰に大將御夫妻の五年祭を行ふに當り往事を追懷し、轉た敬慕の情に堪えませぬ。ましてや世界は大亂の巷にあるの今日、一層の感を深からしむるのであります。依て特に此祭典の記念として乃木大將に親灸せる二三の人々の曾て我乃木會に於て講演いたされました大將事蹟の一部を一小冊子に編み、

二

市内に在る小學校等へ各一本を贈呈いたします。蓋し大將の性格は實に何等の瑕疵なく、あらゆる徳目の體化せるものと思ひます。願くは兒童に對する修身訓話の資料に供せられ、現時世道人心の浮華輕薄に流れ、徳義節操の何物たるを忘却せんとするの傾向ある此時に際し、兒童をして乃木大將の如き一世に卓絶したる偉大の人を追慕景仰せしめ、常に大將を龜鑑として世道風教の頽廢を矯正すべく、國民道德の向上を計る一助たらしめられんこと切望いたします。

大正六年九月

乃木會長法學博士 男爵 阪谷 芳 郎

三

## 乃木大將の事蹟

陸軍歩兵大佐 塚田清市

私は唯今御紹介を得ました塚田でございます、今日は乃木大將の御話をせよとの御依頼でございます。當席へ出席を致しました、然るに是迄に於て既に諸名士の御話があり、又書物にも出来て居り皆様は疾くに御承知のことです。唯今から私が皆さんに御話を致すとしても別段新しい御話と云ふものは持つて居ませぬのであります、詰り皆さんの御承知のことを繰返すやうなことであらうと思ひます、況して私は學者的に種々の例を引いてさうして御利益になるやうな御話をすると云ふことも出来ないのであります。此邊は前以て御断りをして置きます。

回顧致しますと丁度當年の昨日は英國のコンノート殿下の御旅館たる伏見宮の御殿に於て大將に御目に懸りましたのでございますが其際には大將も平素と格別變つた御様子もなく、色々雑談の間には斯う云ふ冗談のこともありました、稻葉式部官が同席でございまして、其稻葉式部官を指して私に向つて言はれるに、稻葉君は基が打ると云ふことであるが、私とどの位の力であらうか、との言でありました、私は大將に向つて稻葉君は私と大概互角の基であるから、閣下も互角で御對戦なすつたら宜いだらうと思ひますと、御答し

た、所がア、左様か、其位だらうと思つて居つたと云つて笑はれますと、稻葉氏が否々さうではない、私は伏見宮殿下と大概變りはない、先づ殿下に黒を以て御相手を申上げる位であるから中々互角どころの基ではないと答へられた、そこで一同大きな聲で笑つたやうなことがありました、それから暫く雑談をして御別れをなし私は宿に歸り正装に着更へて宮中に殯宮拜禮に參内の途中、丁度櫻田門外に於て儀仗の付いた一列が御所から下つて御出になりますので、外國の皇族殿下と認めまして私は車から下りますと果してコンノート殿下で、敬禮を申上げました、然る所丁度乃木大將は矢張正装でコンノート殿下に隨行して居られました、而して大將が私に面して幾回も頭を動かして答禮をされたのであります、是が即ち此世の御別れでありましたことを考へますと實にタツタ此間のやうにありますが、最早今日では滿二年を経たことで、唯今から大將の事蹟に付て御話をしやうと思ひますと實に感慨が深いのであります。

私は明治十一年に乃木大將の部下にありましたが、大將は當時中佐で麻布の歩兵第一聯隊長でありました。爾來明治十六年迄部下に居りまして、他隊に轉職しましたが、それから後尙二回大將の部下にありまして彼の日清日露の大戦役に大將の副官とし幕僚として従事することを得ましたのは實に光榮に考へて居ることです。斯の如き關係でありましたから大將御夫婦には始終御尋もするし、又或時は私の所を御尋ね下さると云ふやうな譯で遂に家庭の交際上に於ても互に心易くなりました、つまり明治十一年靜子夫人を迎られて以來三十五年間知遇を辱ふしたと言ふてもよいかと思ひます、それで大將が自刃をされる前日に於て私に遺言状を遺して居られますが夫を見ますと此度のことには就ては定めて驚くことであらう、併ながら萬事靜子が相談をするであらうから宜しく腹藏なく意見を言ふて呉れよと書てございました、斯う云ふ關係がありま

すので自刃をされてから後にも親族諸君の御依頼に應じ、法定の遺言執行者を致したのでございますが、併し伯爵家の斷絶と云ふ次第であるものでございますから中々容易に始末が出来ず遂に東京市へ乃木邸を引渡したのは翌年の三月になつたやうな次第でございます、又親戚の皆様と御相談して處置を致しました物品の個數でも諸方に寄附したる書籍類其他雜品の外約三千位の點數と覺へて居ります、又財産分配のこともございますが、併し幸に流石大將の御親族方のことでありまして分配等に付て今日迄何も故障がありませんが誠に仕合ふことゝ存じて居ります、扱て是から大將の事蹟につきお話をいたします。

系圖の概様 乃木家は佐々木高綱の嫡子で乃木次郎左衛門尉光綱と云ふ人の後胤であります、大將の父は乃木十郎希次と云つて長府の藩士で母は土浦の藩士長谷川金太夫と云ふ人の長女であります、而して此父君は武藝故實其他武士道等の學問を能く修めた人で、殊に武藝に長じて居られました、元は藩の醫師をして居られましたが遂に三十三間堂の通し矢をされてから武藝の達人と云ふ名が擧つて藩士に引立てられたと云ふことを大將からも承つて居ります。

大將の幼時 大將は嘉永二年に江戸に生れ、安政五年の冬父母と共に長府に移り、元治元年の春秋の玉木氏の所に往つて學問をされることになりました、然るに此學問に往かれたと云ふことに付て大將から親しく話を聞いて居ります所を申しますと、玉木の伯父に教育される積りで參つた所が日々百姓の仕事ばかり長くさせられて一時失望をしたことであつたが、併ながら後になつて考へて見ると實に此上もない仕合せであつた、何故なれば幼少の時は頗る身體が虚弱であつたから、伯父は之に學問をさせてはいかぬと見て百姓のとをさせたのである、故に自分の身體の健全なる基は玉木の伯父の賜のもので一生の爲には容易ならぬ恩人で

あると云ふて居られました、それから慶應元年の秋より萩の明倫館に通學し、後に藩から入學を命ぜられて遂に明治元年迄同館に在學をして居られました、さうして明治四年に陸軍少佐を以て出身をされたのであります、其以前學れた武藝は弓術、槍術、劍術、馬術、等々の中に付て一番上達して居られたのは劍術が目錄以上の上達であつたやうに見えて居ります、それから奥羽の戰爭には全く關係して居られませぬが長州と小倉との戰爭の時に出征をして居られます、又藩より伏見の御親兵の兵營に出て練兵の教育を受け、藩に歸つて藩の練兵教官をして居られたこともございます、以上私が見たのでなく全く系圖履歷書等を調べたこと御話を致したのでございますが、是から私の見たことを御話を致しませう。

私が乃木大將に長い間知遇を受けて居つて大將を見た所を一言に纏めて申しますれば、大將は忠誠の人であつて而して修養を積んで彼の偉大なる人格となられた人であると云ふの外はございません、是迄各地の學校に於きまして生徒諸君に向つて大將の御話を致します時には諸君は乃木大將のやうな偉人の事蹟は到底學ぶことは出来ぬ、大將は神のやうな人である、神の事蹟は學べぬと諦めて仕舞つてはならぬ、大將の事蹟以て學べざるものもなし大將の彼の偉い人格になられたのは全く修養の力である、諸君は奮發一番大將以上の人にならうと云ふ志を立て勉強なされよと是迄申して居るやうな次第でございます。

大將の孝道 大將が父母に對する誠實柔順の狀況は言葉で以て到底現はし難いのでありますが茲に一二の例を申せば私共が罷出て色々御話を承つて居る間に御兩親の中から大將を呼ばれますとハイと云つて如何にも正しい返辭を爲し、さうして一寸失禮しますと云つて直ちに父母の前に往き兩手を突いて満身の敬意を表して父母の命を待つて居られる、それで父母から命ぜられたことがあるとそれを謹んで承はる恰も 陛下に

對し奉らるゝ時の様で誠に吾々傍觀者をして身體の痺れる如き感じを與へられたものであります、又勤務に出られる時でも唯今から出勤を致します、今日は勤め先から何處々々へ廻つて何時頃には歸宅を致しますと申し歸つて來ると何を備置いても兩親の許に往かれて唯今歸りました、今日は別に何も變つたとはございませなんだ御安心下さいませと云つて兩手を突いて頭が疊に付く如くに禮を厚ふされた、其至誠の有様は見る度に吾々は深く感動を致したのであります、斯の如く大將が父母に對して謹慎を表し、又父母に對して何事も聊かでも心配を懸けないやうに、安心をされるやうにと云ふことを心掛けて居られたことは枚舉に暇のないのであります、又大將の母君が臺灣で病氣に罹られた時御夫婦の看護も中々臺灣では名高いことになつて居るのであります、又大將の母君が臺灣で病氣に罹られた時御夫婦の看護も中々臺灣では名高いことになつて居ると云ふことであります、現に此處に掛けてあります御夫婦の頌徳碑と遺髪碑は是は臺灣に出來ておりますものを石摺りに致したもので私が今日乃木會に寄附を致しましたのですが御夫婦の碑は彼の孝心の厚き大將が生前に望まれた通り母君の墓の脇に遺髪を埋めて建てた所の碑であります又頌徳碑の此處に書いてあります如く大將と夫人とは母君の左右に在つて全く寢食を忘れ帯紐解かずに母の看護を能くされたと云ふことであります、併し大將の御兩親も大將から承つて居る所に依りますと中々大將を導かれるには深く注意をされたと云ふことであります、故に大將も御兩親の恩を一層深く難有く感じて居られたに相違ないのであります、或時大將と信州地方を巡廻の際木曾から飯田に越します所に大平越へと云ふ八里許りの難路がございましたそれを越す時に其大平と云ふ峠の村に宿泊を致しまして、大將と爐を圍んで居つて話を致しました、其時の大將の御話に私の父母も中々骨を折つて教育して呉れたことであるが、今日は色々の話をしやうじやないか

と云ふことであつて、遂に御兩親の御話に移り大將の申さるゝに私の父は中々嚴格なものであつて、私が小さい時に萬事注意して呉れた内で一番烈しく感じ今以て忘れずに身體を鍊へる上に參考にして居ることがある、それは私が寒中或時寒いと申した所が父が暖かにしてやらうと云ふことであつた、着物でも餘計着せて呉れるか知らんと思つて居ると庭に連れて出て、さうして水を酌んで之を被れ、さうすると綿入を二三枚重ねたより暖かになると申された、暫く躊躇して居ると己が被せてやらうと云はれたので私は奮發して其水を被つて見た所が果して後は身體が暖かになつた、爾來此教を服膺して居る、安政五年に藩主の譴責を受けて父が長府に歸る際は丁度十歳であつて、東海道を經て長府に歸つたが、途中より船に乗り長府の濱に着くや幕を張つて其中に親子四人と僕一人と五人が這入つて居つた、私はまだ十歳位の年であるしどう云ふ譯で斯う云ふ所に這入つたかと思つて居つた、所が段々後とて聞いて見ると元來江戸に在勤をして居つたものであつて長府には邸宅はないのであるから邸宅の出來る迄は濱に幕を張つて居ると云ふ父の決心であつたのである、それから邸宅が出來て百日の閉門を命せらるゝや父は毎日袴を穿きさうして座敷の中央に正座して朝から晩迄少しも動かなくつた而も百日の間一日も怠らず嚴格なる謹慎を表して居られたのは私には非常な感動を與へられたのである、子供ながら能く父はあの位絶へず謹慎を表して居ることが出來ると思つたのである、又母は此閉門中餘程苦心をしたもので元來蓄へのなき上に江戸から歸つて直に閉門を命せられたることであるから家計上の不如意は云ふ迄もないことであるが、苦心の結果遂に米を輓いて煎餅を拵へ而して夜間之を僕に持たして町に出し日用品と交換をなし家計の助けをされた、此母の辛苦を亦深く私の心に感じて居ると云ふ話がありました、それで大將が嚴格で、ある物を粗末にされない、或は質素を能く守り無駄なことをさ



れない、或は又飾り氣のあるやうなことはされなかつたのは蓋し偶然ではない、必ず父母の教へられた所がある。私は信じて居ります、それから大將は此の中興鑑言と言ふ(現品ヲ示ス)を自分で版下を書いてさうして版に起し、又此中朝事實の附録も同様、自分が版下を書いて何れも製本の上友人其他に分られたのであります、此事でも矢張父の教を受けて居られると云ふ、一例を御話すると、大將が萩の玉木家に居られた際に父君が大將へ土産として武教講録と云ふ本を持つて來られた、其本は大將の爲めに父君が態々寫して持つて來て與へられたのであると云ふことは曾て大將より御話を聞いたことがございます。

それから母君も偉い御方であつた一例を御話すれば大將が臺灣總督を拜命されて三日目に私は御喜び旁々大將の御宅を御尋をしました、丁度母君が御所から下つて來られた時でありまして、直ぐ御目に懸つた所が能く來て呉れた、是でお前にももう再び會ふことが出來ぬかも知れぬ、私も希典が臺灣總督となつたに付て臺灣に行くことに決めました、マア聞いて下さい、希典も頻りに私に臺灣に行くな、臺灣は風土の變つた所である、氣候も悪るし非常に心配であるから是非東京に残つて呉れと云ふけれども、私が東京に若し残つたならば希典のことであるから、始終東京の私を氣遣ふて御勤をすることが十分ならぬではあるまいかと私は深く心配致します、それで私が臺灣の土になると云ふ決心さへしてやれば希典は安心して臺灣總督の職務を盡すであらうと思ひますから私は愈々行くことに決心を致しました、唯今御所から斯様の御品を拜領致しましたと云ふて拜見をさせられたことがあります。

大將が先生の教を守られたこと 大將は先生の教を誠實に服膺された人で其實蹟を見ると丸で先生の理想の型に嵌つて居るやうに思はれるのであります、何故なれば先生の教にあることは遺憾なく而も有益に實行

して居られるのであります、現に吉田松蔭の士規七則の如き皆さん御承知の通り士規七則の原則としては即ち忠孝、此忠孝を遺憾なく盡されたこと、第二に我國體は他國に異る所があつて尊い國であると云ふことを能く奉體して居つて萬事の勤めをされたこと、第三に義勇に厚いこと、第四に質實にして人を欺かぬこと、第五に古今に通じて學問を廣くされたこと、第六に師の教を守り又人の説を能く聞かれたこと、第七に何事にも一死以て之れに當る人でありましたから確固不拔で少しも動するとのないものであります、又山鹿素行を守て居られますが事蹟に就て是等を能く考へて見ると七則に盡く當嵌つて居るのであります、又山鹿素行の武士道を能く學んで頗る山鹿先生を崇拜して居られました、殊に中朝事實を始終愛讀されましたが、自及前に山縣元帥の所に行かれて、さうして 今上陛下に奉つたことを御依頼になつた事も中朝事實に基いて居る様であります其控を此頃山縣元帥閣下から拜借して來ましたが、其裏面に山縣元帥の書いて居られることがあります、讀んで見ませう。

大正元年九月十四日椿山莊老主

九月八日乃木大將椿山莊に來訪し種々目下の情勢を談論したる後此書を出し予に一覽を請ひ予に於て同感ならば 陛下に奏上を依頼すとて別に清書したる一本を出したり予冊を開き此書題名如何と問ふたるに中朝事實の抜書とでも申すべきかと一笑して答へたり而して 先帝崩御あらせられたる時の歌の「一首を書し余に示し余の拙詠も」請ふたるを以て三首を示したるに其中一首を再三詠じ適意の感想に見へたり。それで乃木大將が山鹿素行の學問を深く信じ且之を頻りに學べられたのは如何なる點に信頼して居られたかと云ふに是迄段々大將の説を聞き又種々の事蹟に就て考ふるに山鹿素行の學問は日本の武士道を説いたもの

であつて、所謂孔孟の學問のやうに他から來て居る學問でない、日本の學問である、それであるから日本人は此山鹿の武士道を深く研究して、さうして大和魂を十分練つてそれから後に世界各國の學問に廣く涉つて研究すべきものである、要するに武士道が我國本來の學問であるから先以て充分之を學ぶべきであると思ふ御考へであつたと思ひます、而して現に山鹿素行を祭られた所の祭文を讀んで見ましても大將の意思のある所が分ると思ひます、即ち大將の祭文に「我國の精華を發揮し中外の區別を明にし云々」と云ふことがあります又「希典幼時父祖の教に従ひ先生の遺書を讀み其高風を慕ふて已ます云々」と云ふことがございます、又「陛下の御寵眷を蒙ると云ふことは全く先生の教を服膺した結果と云はざるを得ず」と云ふこともございます、私は此中外の別を明にしと云ふことが大に大將の力を入れて書かれた所であらうと思ふて居るのでございます、是は今日も既に學者先生の御話があると云ふことでございますから此先生方から段々御話のあるところと思つて居ます、中朝事實の中で「人生れて其父祖を思はざるは非ず云々」と云ふことを書きました一節を、自及される前に自から之を書し佐々木高綱の肖像畫と佐々木高綱の陣中の旗の寫と此三つを表装して佐々木神社に奉納するように拵へて置かれましたが、今は此三幅は佐々木神社に奉納してございます。十將に常に人は言行一致でなければならぬと申して居られました、私が或時大將の宅に參りました際に此事に付て大將が言はるゝに、言行一致と云ふことは人の美德であつて大事なことであるが、どうも言行一致と云ふことは言ふべくして行ふべからざることであると云ふやうに申す人があるが一體どうだらう、私の考へには言行一致が出来ないと諦めて仕舞ふ人は日本人としてあるべきものでないと思ふ、どうしても一度言ふたことを實行する勇氣のない者では到底齎すべき人でないと思ふが如何に思ふかと問はれましたがそれは至極

御同意であります、如何にもさうでなければならぬと私が申したら、然らば君はどうして此言行一致をするかと反問されました、それは意思が鞏固でありさへすれば出来るではないかと申すと、さうだ實に意思が鞏固でなければ出来ない、倍此意思の鞏固と云ふことに付て之を分解して申せば到頭義氣と云ふものが盛でなければならぬ、又此義氣計りではないかぬ勇氣と云ふものが盛でなければいかな、吉田松蔭の士規七則に「士道は義より大なるはなし義は勇に依つて行はれ勇は義に依つて長する」と云ふことがあるが是が私は最も良い御手本であるからして之を守るに如くはないと思ふがどうであらふと申されましたので、大に私は敬服を致しましたこととてございますが、大將は其通りに何事に付ても先生の教に能く當嵌めて實行をされた人であります。

大將の忠君愛國と云ふことに付て 是は私が申上げる迄はない皆さん御承知のことではありますが、唯私が感じました一二を申すれば人の病氣を見舞にも國家觀念であることです、丁度私の病氣見舞をされた時の御話をしても御參考にならうと思ふ、或時に私が病氣をして居りますと大將が見舞に御出になつて、餘程様子が宜しいが兎に角餘り無理はせぬ様にせねばならぬ無理をして身體を害すると夫丈國家の損に成るから十分に身體を養つて健康を元の如く回復してそれから出勤するが宜しい、君も國家の御用に立つ年齢がまだ餘程餘つて居るのであるからどうぞ大事になされと言はれました、私の御話では諸君の御感じも薄いだらうと思ひますけれども、私が大將から國家の爲めまだ盡すべき年齢が大分餘つて居るからどうぞ大事にして十分に癒せと誠意を以て言はれる其様の親切と云ひ國家觀念の厚きと云ひ實に深く私は感じたのであります、私のみならず家族の者も流石大將の仰であると云つて一同感じた次第でございます、又忠義と云ふことに付

ては自分ばかりでなく人のことに付ても非常に喜ばれる方であつて、現に我敵のステッセルが旅順で頑強に抵抗するを見てステッセルは露國の忠臣である、露國の陛下は定めし御喜びであらせられるであらうと賞讃された話があります、それから大將は質素にして無用なものを用ひないやうにして居られたが是も大將自分の爲にされたのではない、皆國家の爲であつたことは後の御話で御分りにならふと思ひます、

大將の陣中 大將の陣中に於けることは別段御話をせぬでも偉い勇將であつたことは皆さんも旅順奉天の戦ひ等にて能く御承知のことであるが、作戦以外のことで私の感じたことを御話を致しますれば日清戦役中金州城を攻落し柳樹屯の砲臺も落して敵は旅順方面に退却しましたので第一師團は金州並に其附近に宿營致しました、當時第一師團長は山地將軍乃木大將は第一旅團長で居られました、實際に山地師團長から支那服に毛の裏の付いたものを將軍の寢具として贈つて寄越されました、さうすると將軍は直ちに之を見て斯様の物は入用でない私は外套さへあれば充分である一體如斯な物を贈ると云ふはどうした譯であらふ直ぐ戻して呉れよと、私に言はれましたが私は師團長の厚意に對し直ちに返すことは穩であるまいと申すと、暫く考へて然らば之を病院に贈つて傷病者用にせんとて遂に病院に贈り重傷患者用に致しました、元來大將は己れ一人暖を取ればよいと云ふ考へがない爲めに師團長より贈りたる物に對し此不審が起つたのであります、其後旅順攻撃の爲め金州を出發することになつた、所が折柄大將は病氣に罹られて四十度以上の熱である、愈々明日出發と云ふ時になると大將は從卒を相手にしてどん／＼出發の用意をされますから私は大將に四十度以上の熱で出發されたら途中で倒れて仕舞はねばなりませんまいどうか熱の下るまで此處に滞在なすつて、熱が下るや直ちに後を追ふて來られる様に致したい、明日から直ちに戰鬪する譯ではない、旅順を攻撃する

迄にはまだ大分日數があると云つて色々御勧めしましたが、厚意は難有いけれども此位のことでは御用が出來ないでは濟まぬ、兎に角明日は出發すると云ふことでありましたが、私は出發されては到底いかぬと考へましたので、當時第一師團の軍醫部長で今は大阪に病院を開いて居られます菊地常三郎氏の所に往つて、どうしても大將は明日出發すると云はれる、御承知の通り非常の大患である、之を出立させてはならぬ、けれども中々私が言ふても聞かれぬ、併し是は師團長が厚意的に申されても逆も聞かれまいと思ふ、私の考では軍醫部長の責任を以て止めるの外はない、どうか軍醫部長から御止め下さいと申しましたので夫れから軍醫部長が一應診察の上是では到底明日の出發は出來ませぬ此處に御止りなされた方が能いと云ふても承知されなかつた、到頭軍醫部長は最後に然らば將軍は私に責任を盡させぬと云ふのであらうか若し之を御立たせ申しましては私は言はゞ腹を切らなければならぬと云ふことになる、どうでありませうかと申されました、所が大將は膝を拍つて如何にもさうだ、是は私が悪かつた、然らば止まらうと言はれたのであります、大將は責任を非常に重んじて居られましたから軍醫部長の責任を重んじて出發を止られたのであります、日露戦役の際にも矢張病氣の時がございました、是は別に唯今申しました様な場合ではなく、唯滿州で蒙古境の法庫門と云ふ所に對陣中四十度近い熱に罹られました、實際は戰鬪の状況も將に休戦にならんかと云ふやうな時ではある、人夫に命じ藁布團を拵へさせて上げたのです、所が大將が御厚意誠に有難い折角のことであるから敷きませうと云つて其藁布團を快く敷かれた、私も満足をして自分の部屋に歸り、約二時間許りの後他の用事で大將の部屋に往つて見ますと、先刻上げた藁布團を取つて脇の方に立掛け常用の毛皮一枚を敷いて寢て居られる、是は不思議なことだと思つて彼の藁布團は心持が悪いのでありますかと云ふと、何も心持が悪いこ

とはないが兎に角どうも藁布團に如何に軍司令官だと云つて寝るのは良心に咎められてならぬ、常に私は毛皮一枚を敷いてそれで凌ぎ來つて居るのであるから是で充分である心配して下さるなと申された、支那では「オンドル」と申して腰を掛ける下で火を焚いて夜などは其上に寝るのでありますが着て寝る物も薄いものを着て寝て暖が十分取れるのであります然る所日清日露兩戰役共に此「オンドル」を大將は焚かれたことがないので、併ながら他の者にも焚かせられなかつたかと云へば誰が焚いて居らうと敢て止られもせず唯時折餘り澤山焚いて此戰爭が濟んでから後に支那の人民に燃料が不足で困らすやうなことは成るべくしないが宜いぞよと言ふて居られました併し此寛大なる戒めと實踐躬行には心ある者は皆恐縮して居りました、大將が寢所の下に火を焚かれさいすれば唯今御話したやうな藁布團を拵へて上げる必要はないのであります但し致しても此「オンドル」を焚かず唯毛皮一枚を敷いて火の氣のない所で寒氣を凌いで居られました、是には誰も感服して居ました、それから大將は兵卒と同じ物を食すると云ふことを始終力められた、固より兵卒と艱苦を共にしやうと云ふ御考に違いないが、一ツには大將が兵食をなされると炊事場に於て常に能く食物を注意して拵へますから自から食物の監視となり詰り兵卒等に不出來の飯や菜を與へざるよふ注意されたので大將の心切は概ね斯く注意深き所に有つたのでございます。

又戰地で食物を好むことは出來ぬ若し好み得る場合があつても好ではならぬ兵食を以て健康を維持する習慣を付て置かねばならぬと覺悟して居られたに相違ありません、或時腸胃が悪いと聞きましたから從卒に命じて粥を煮さして上げましたが食事後に往つて見ると粥は食せず矢張兵食を食つて居られました位で、一切兵食以外の食物は用いられなかつたのであります但し從軍外國武官や師旅團長等と會食の時は無據特別に出來

た物を食されたともあります、日清戰役の時と異なり日露戰役には軍司令官でもあり軍司令部には食品も他の材料も澤山あるので大將一人位の爲に特別に食事を拵へることは何でもないことでもあり又大將は老年でもあり幕僚諸員も心配して何か良い食物を進めんとしても一向承知せられず、又稀に管理部から取られた食品等もありましたが其代金は綿密に調べて支拂い官金を以て仕入たる物を私に使用せざるよふ深く注意して居られました、茲に面白い御話がございます、私は日清戰役の終に大將と別れまして大將は第二師團長になつて私は間もなく福州から諸隊よりも先に内地に歸つて凱旋後復員の準備致すことになり各隊の副官と共に先發して凱旋しました其途中金州に大將が第二師團を率ひて居られますから、之れに立寄り大將を御尋致し暫く御話をして其處を辭しますと第二師團の田邊と云ふ副官が私に一寸別席をして呉れと申まして別の部屋に私を誘い、偕、君に尋ねたいことがある外でもない、乃木閣下が師團長に赴任されて以來どうも不興の様子であるから如何にしたら宜からうと心配して居る、君は長い間乃木閣下に附いて居つたが、一體どうしたら宜いだらうと尋ねられましたから、私は奇態なことであると思ひ一體如何のことが不興なのかと問ひましたらば金州に着任せられてより準備のしてある部屋に這入られず、食事を拵へさせて上げてても或は西洋酒を持つて來て上げてても皆之を退けて用ひず部屋は自から定めて其處に住い食物は兵食を用いらるゝ等更に要領を得ないと云ふことでありました、私はそれなら分つた、それは大將を君が知らぬからである、一體大將は誠に取扱易い方で、何も拵はぬが宜いのである、他の者と同じやうにして上げさへすればそれで満足されるのである、食事でも矢張兵卒に食はせる食事と同じものを持つて來て上げればそれで宜しい、又部屋でも殊更に障子を貼り變へるとか色々部屋を裝飾して上げるのはよくない、君方が餘り心配しすぎるので大將は

困つて居られるに相違ない、要するに大將は殿様にして持上げてはいかぬ、何でも艱苦を共にしよふと思つて居らるゝ大將の精神を呑込さへすればそれで宜しいのであると申したことがございました。それで「オンドル」は焚かす部屋の内暖を取るにどうされたかと云ふに火鉢のやうなものに炭があれば炭を二ツ三ツ火を起して眞に手先を焙り煙草の火にされましたが日清戦役の際は炭がないので高粱の幹を五寸位に切つてそれを二三本位宛焚いてそれで暖を取つて居られたのであります、日清戦役中蓋平に向つて前進をする際大將が首に絹のハンケチ丈け巻き普通の外套のみで馬に乗り大風雪中防寒具も用ひず北進されましたが他の者は馬に乗つて居ると足の先が非常に冷却して苦痛に堪へず遂に馬から下りて徒歩致しました、然るに大將はどうしても馬から降りずに行進を續けられたことがございます、其時に私は大將に今日は随分閣下も御寒かつたであります、少しは馬から下りて御歩きなされるだらうと思つて居ましたが更に御下りなさらぬで到頭馬に乗り通してありましたが随分困難でありましたらうと尋ましたら、大將曰く倍困難と言へば困難であつたけれども兎に角此際馬で一ツ通して見てやらうと云ふ私に一の勇氣が出た、それで今日は其勇氣を頼んで乗り通して見たが案外勇氣を出すにあれ位のことにはやれる、何でも自分の思ふことは大概勇氣を鼓舞してやれば出来るもので、私も自分ながら感心したと云ふ話がありました、斯様に艱苦に打堪へると云ふ觀念は始終絶へなかつた人であります。

大將の謙遜 大將は軍人中でも學者の方でありましたが、少しも學者振るやふなこともなく、人が詩を持つて來て之を直して下さいと云つても歌を持つて來て意見を聞かうとしても更に意見を述べられたとがなし又書を書くこと云ふても餘程自分が心易くした人とか、或は又戦死した者の碑とか、或は其他已むを得ない人の爲めとかでないと思はせませんでした、後には戦死者の墓表若くは戦役紀念碑の外は一切書かぬよふにされました、夫から一切印を捺されたことはありませぬが見認印を押されたものは少しございます、又額面を書かれたことも餘りありません、私が明治十六年に御別れをして伏見隊に轉じました際「如山如林」と云ふ額面を書いて下さりましたが、その外は眞に二三枚外なからうと信じて居ります、大將は傲慢らしいことは聊もない人でありましたから伯爵であり陸軍大將であるからと云つて人を見下す様なことはなく、貴賤貧富若くは官の上下等に付て區別をされることは更にございませぬで誰にでも同じやうに接しられたのであります、ふして質素にして誠意がありますから大將に接して一度言葉を交へた人は其温容を慕ふて長く忘れられぬ徳を持つて居られたのであります、又人から訪問を受けると是には必ず答禮をすることを心懸けて居られました、又手紙を書いて人に遺すにも其文章に於て上下の區別は一切ありませんでした、又代筆の手紙を出されたこともありません、大將が私の宅を時折御尋ね下さつた時の状況を御話すれば何時も馬に乗つて馬丁を連れずに来られ必ず自分で馬を繋ぎそふして宅へ上がられ誠に親切に話をされる様は眞に友達の如く少しも隔てる處はありませんでした、或時丁度日清戦役中の紀念日に御出になりました、色々紀念の御話もありまして一寸筆を貸して呉れと云ふことでもありますから、出しますと大將は斯う云ふ詩を書かれました。

青石關頭雪、飛雲塞下風、當年兵馬夢、感慨有誰同。

丁度蓋平の裏に青石關と云ふ所がございます、其前きに飛雲塞と云ふ處があつて、其所で支那の宋慶と云ふ將軍が率つて居る軍と相對して居つて、雪と寒氣と兩方で困難をしたことがありますが其紀念の詩であります、此詩を書かれた時でもどうだらう此詩は紀念の爲に拵へたのだが、君一ツ見て意見を言ふて呉れんかと

申して私に出して見せられました其謙遜の有様と云ふものは私が茲に御話を申上げるやうなことではありませんでした。

大將の用意周到にして勤勉 大將が用意周到でありましたとは之を軍隊のことから申しますと中々細微な所まで能く注意が行居いて、僅か一時間計り軍隊を見られた時でも所感に就て講評されるのが大概三時間若くは四時間位に亘ることがありました、偕其講評の仕方が精神的でありましたから聴く者をして少しも飽くことなからしめたのであります、又大將の自刃をされる前の準備としましても總て諸方から參つて居る書物其他の品物等は盡く返す先を明かにし、又軍務に付ての秘密書類等も残らず之を區別して、さうして綿密に附箋がしてあつたのです其他財産の分配御自身の準備等實に能く行届いたものでありました、大將が勤務上に精勵なりしとは申上る迄もないのであります但し勤務餘暇には能く農事に精勵されました元來玉木氏から農事のことを教はつて居られ而も身體を健全にしたのは之れが爲めであると云ふ觀念から出ましたものか、兎に角少しでも暇があれば那須に往つて農業を爲し又東京の邸宅内に在る畑も自から耕して種々のものを作て居られたのであります、大將が自刃をされる前に大將の甥で長谷川と云ふ人に農業姿の肖像を刻ませて居られました、長谷川氏は此彫刻を始める前に大將の正服姿を彫刻したいと申したるも農業姿を好まれたのでありましたが、彫刻が丁度自刃をされます年の五月頃に出來上り、大將は之を見て非常に喜ばれたと云ふことでもあります、今は長谷川氏が此彫刻を型として石膏に作り或は銅像に作つて居るのでございます、肖像として現在のものゝ中では大將も出來上りを見て居られ而も生前甥の製作に係るものでありますから私は一番よい肖像と思て居ります、茲に綿密なことに付て御話をもう一ツ致しましよふ、明治三十五年に乃木家の歳暮

の一件と云ふ書付をして御夫人に示されたものが跡始末の際に發見されました、夫れは十二月十五日から翌年一月の十五日迄の間の日々のことが書いてあるので、例へば煤拂をするとか、或は餅を作るとか、雑煮の拵へ方、等總ての日々のことが書いてあるので、實に綿密なものであります。

大將の質素に付ては既に皆さんも御承知のことではありますが、偕此大將の質素と云ふことに付て誤つて傳へ居ることも段々あるやうに思ひますから茲に一言したいのでございます、それは或る書物を見ますと大將が日露戦役の凱旋の際新橋停車場に着くや直ちに辻車の汚ないのに乗つて御所に參内されたと云ふやうなことが書いてあります、是等は大きな誤りであつて、私等のやうな證據立るものがあるから幸に打消されませんが、現に書物として後に残ることは誠に残念に思ひます、日露戦役凱旋の際軍司令官たる大將は幕僚其他各部長を率ひて各々皆馬車に分乗し堂々と御所に參内されたのです、然るに大將の品性を極端に申せば宜しいやうな考を以て遂に斯様なとまで書いて居ります、三浦將軍でありましたか大將の話に就て最負の引倒しをされては困ると云ふことを申し居られますが實に其通りで、餘り極端に人格を言ひ現さうとして飛でもない所に引込んで仕舞ひますから困るのであります、私の見た計りでも大なる間違の書いたものが澤山あります、大將の質素と云ふことは現に東京市に寄附になりました所の邸宅の建築を御覽になつたら是で明であらうと思ひます、何故なれば彼の建築は普通の家とは少しく異つた形ちで唯丈夫と便利を目的にして見悪いことは少しも構はず節はあつても丈夫な木材を以て造られたもので、初めに大工が木材其他の材料等に就き御身分相當にと意見を申して大に呵られたと云ふ話があります、さうして二階建の下に地下室を設け三階の家を建て居られますが、彼の屋敷は門の方から這入れば右の方へ斜面になつて居る、其斜面になつた所を應用

して半地下室となし其周囲は石を積であるのです部屋の内には飾り氣は少しもなし、二階の踏板と下の天井板は一枚の厚き板を以つて兼用し、三階座敷の三面は總て物置にして、屋根の勾配の向ふの隅迄物が置ける様になつて居ります、大將のされたことは萬事を通じて質素にして無駄のないよふにと云ふことを努めて居られたのは、之を見て分るのであります、之れは(現品ヲ示ス)大將の使用して居られた銅貨入であります、是をば赤の毛皮で幾つも拵へて置いて居られました、是は不用になつた分の一であります、斯様な頑固なものを作られたも矢張長く持つやうにしたのであります、此眼鏡も大將の品であります、是は恐らく大將が先年歐羅巴に往かれた時に用ひられたのだらうと思ひます、何故なれば後に遺つて居つたものには以上のものや金縁眼鏡はありませんでした、大將は軍務の時の外は初めは和服に袴でありましたが中途から軍服を始終着て居られる様になりました夫れは明治廿一年に西洋から歸國されてからだと覺て居ます、其後はもう一切軍服を脱がれたとはありません、朝起きるから夜寝るまで軍服でありました、併ながら私は跡始末をする際迄は定めし日本服の紋付に羽織袴と云ふやうなものが二通りや三通りは準備してあるだらうと思つていましたが、調べて見ると日本服は一枚もない、唯僅に中耳炎で赤十字病院に這入つて居られた時に庭内を運動される際に用いられた日本服の袴と着物が残つて居つたのみであります、斯様に一切不用なものは置かぬと云ふ主義を持つて居られました、又大將が稗の食事をされたことは皆さん御聞きのことでありませう、是も矢張世の人に誤つて貰つてはならぬと思つて居ります乃木家では態々稗を買つて稗の食をされたのではないので稗が彼の那須の別荘で出来る、元來彼の地方では稗が一番宜しいのである、故に彼の地で出来た稗の處置に困り、それならと云つて大將が之を賣ると云ふことも出来ず、到頭無駄にしてはならぬからして之を日々の

食物にされたと云ふやうな次第であります、乃木家の召使は下婢が二人より餘計であつたことはなし、それに書生が一人丈けでありました、來客があつた時の取次は書生で、客の側に出て働く者は誰かと云ふと夫人でありました、大將位な他の家では仲働とか小間使とか云ふ人々がする所の煙草盆とか御茶を出すとかのことは總て夫人がして居られましたのであります、私は丁度當年の七月二十七日に大將を御尋致しましたが折柄御在宅でありまして、良い時に來た今から五時頃迄話して夕食を共にしようと思つて居ると夫人から夕食は五時頃迄大將と御話を致しました是が長い御話をした最後でありました、五時になりましたと夫人から夕食の御馳走をされました、其御馳走の様子を少しく御話致しましたよ膳の上に付て居つたものは茄子の焼いたのと刺身に大根の卸したのを混ぜたもの、野菜物の煮たもの等で他のものもまだあつた様に思ひますが何品か記憶に残りません、此膳を夫人自分から持つて來られました、さうして何もなければ主人が庭園に作つた所の茄子を焼いたから澤山食つて下さい、又御飯は相替らず私の家の例の通りの稗の御飯であります、殊に今日は冷飯でありまして誠に御氣の毒であるけれどもどうぞ十分食つて下さいと申され櫃も自分が抱へて來て給仕をされました、又其すつと前のことでありまして今の家とは違つて元の家のときでありましたが、私が或日の夕刻大將の宅を訪問致しますと大將がいきなり玄關に出て來られました、丁度好い時に來た、今食事をして居る時であるから食事はまだやらう、一緒に食事をしながら話をしやう、と申されましたから然らば頂戴ませうと云つて大將の食堂に通つて見ました、所が古い机の上に刺身を一皿とそれから鱒の目刺の焼いたのが盛つてあり、其脇に野菜物の煮たのがある又夫人は其傍で彼の鱒の目刺を焼いて居られる、斯う云ふ状況でありました、大將からまあ其處へ座れと云ふことでありまして其飯臺の前に座りますと大將は皿

を持つて来いと夫人に命じて皿を一枚持つて来さして、箸を倒にして其刺身を半分分けて、是は甚だ失禮だけれども最う今外から取ると云ふことも出来ないから之を二人で分けて食はうではないか、と云つて刺身を分けて下さいました其時には私は實に山海の珍味を集めて御馳走になつたより大將の其誠意を以て刺身を半分分けて下さつた厚意と云ふものは實に難有く骨髓に徹した次第であります、(拍手大喝采)總て乃木家に於きましては來客に對しては料理屋から料理を取つて差出すと云ふことは甚だ面白くない、何故なれば金さへ出せば料理屋から幾らでも取れるものである、それよりも家の者が畑に作つた所の品物を家の者が拵へて客に上げるこそ宜い御馳走である、決して料理屋から取つてそれで宜しいと云ふものでない、是が乃木家の定りでありました、靜子夫人は大將の母君から教へられて之を守つて居られたのであります。

大將の廉潔 日露戰役の凱旋の際新橋より宮中に參内して大將は 陛下に拜謁を賜り、感極つた様子で吾々の所に下つて來られました、吾々にも亦拜謁を賜はるので暫く其處に控へて居りますと大將は私を脇へ呼ばれまして大奉書の紙包を私に差出し、是は君に預けて置くからどうぞ持つて歸つて呉れ、と云ふことでありました、それで私は兎に角大將の御宅迄持つて往くとだらうと思ひまして之を預りさうして一同の拜謁が済みまして大將以下打揃ひ參内の時の馬車で乃木家に凱旋を致しました、一同が祝盃を擧げて解散をしましから後に彼の包物と大將にお渡し、やうとしますと大將が否それは私が今受取るのではない、どうぞ長く君に持つて居つて貰ひたい、然らば是は何物か御取調を願ひたいと云つた所が、それは恩賜のものであるが併し私が持つて居るのは都合がわるいから君に預けるから持つて居つて呉れと云ふことでありましたが、然らば其中を調べて見ましょふと云ふて取調ますと現金の大金でありました、それで私は是は御預りすることは出

來ませぬ、若しやそれが紛失でもするとか盜難にでも遭ふと云ふことがあつては相濟まぬことでありますから私は御斷りをするとして申してもそれはさうでもあらうけれども又私が持つて居ることも出來ぬから兎に角君に持つて居つて貰ふが一番適當であるから持つて居つて呉れ、と斯う云はれ、其中に段々凱旋の際のことであり訪問客も澤山來られますし、混雜をするので據ろよく私が一時預りました、そふして之を銀行に保護預けを致し翌日大將の所に往つて昨日の物は私の名を以て兎に角銀行に保護預けを致しましたが、是はどうしても大將の名を以て御預けしなければならぬからどうぞ印を御渡し下さいと申しました、所がそれは君の名で預けて貰つたのが此上もない自分の望む所である、どうぞ其儘にして置いて呉れと云ふことでありまして、遂に止を得ず其儘にしました、それから後彼の御下賜の金員に就て如何にしやうかと云ふ段々御相談もありまして、到頭大將が金の時計を頂戴して居られると云ふことから然らば將校に金の時計を分たう、下士以下にはどうしやうかと云ふ御尋でありましたから下士以下には金で御遣りになつては如何と申ますと、成程それが宜からうと云ふことで遂に金時計を三十七個か八個天賞堂に申付て拵へさせ願恩賜第三軍紀念と云ふことを其地板に書き、尙時計の箱には呈誰某官乃木希典と自書してそれ／＼願たれたのであります、此時計(現品ヲ示ス)は即ち私が貰つたのであります、それから下士以下には金員を分けてやられました、それで此時計ばかりでも三十八でありますからどうしても四千圓以上五千圓近い金になつて居ります、又下士以下にも軍司令部の下士以下は澤山ないのでありますけれども是も随分な金になります、到頭仕舞に千圓許りの金が残りました、それから此残つた金丈けは大將に御渡する積りで大將の所に戻さうとしましたら、いや其始末も君にどうしても頼まなければならぬと云ふことでありまして、どうも其始末に就ては誠に困りました



が、色々御相談の結果遂に彼の二人の子供さんの祭典をしやう、さうして二人の子供さんが在世中世話になられた諸君を呼んで祭典を爲し且つ饗應しやうと云ふことに極りまして、青山墓地では親族方其他にて祭典があり又芝の紅葉館に大將の子供さん御二人の御霊を移して彼處で祭典をして、さうして御世話になつた御方々に参拜を願ひ後で宴會を開かれましたが三百人位の人であつたと思ひます、之れで残らず其金を使つて仕舞つたやうな次第であります。

大將が二三の人に金を貸して居られましたことが跡始末の際に分りました、之を調べて見ますと證書らしいものは一ツもなし又證書のないものもありました、殊に金高を書いて右正に御預り申候と云ふ書付を書かしてあるのもありましたそれが千圓餘で借りた人は相當の身分のある人であり、さうして尙其外に當人から無證書で借りて居ることを申出たのもあります、大將が金を貸すに右正に御預り申候也と云ふ書付を書かせられたのは其人の身分を重んじて書かせられたのであらうと云ふことが大將の性格を知つて居ますからして判断が出来るのであります、合計しますと三千餘圓の貸金がありますけれども證書としての價値のあるものは一ツもありません、流石借りた人も無證書で何程借りましたと明細に申出るのは夫れ丈大將の徳が高いのであると思はれます、それから出征の供をした馬丁に年金を遣して居られたのがあります、是も矢張大將が戦地に往つて働くには馬が必要である、馬を能く養つて十分に己の任務を能く盡したからと云ふことに報ひられたのでありませう、其年金の遣り方は大將が自分の年金を受取る毎に其内よりやる約束をして始終送つて居られたのであります。大將が凱旋をされてから後に紀念碑とか或は墓表とかを書いて下さいと云ふものが澤山ありましたが是は皆快く書いて與へられたのであります、然るに中には書いて貰つた御禮を

しなければならぬと云ふ考を以て菓子折とか其他の品物とかを持つて来た人も段々ありました、所が大將は盡く突き戻して仕舞はれました、丁度私も大將の御宅に罷出て居つて人が持つて来た時に際會したことがございますが、實に傍に見て居つても持つて来た人に氣の毒なと思ふ位ひ跳付けて返して仕舞はれたのであります、全く大將の考は左様なものを貰ふと云ふ精神が寸毫もないから無下にそれを追歸して仕舞ふことがあつたのです、兎に角大將は何處迄も潔白にして往かうと云ふことが専らであるから、是等の場合に情と云ふものを顧みて居る暇はなかつたのです、大將が質素にして飾り氣もなく無駄なことに金を一切使はれなかつたに拘らず後に残つて居つた現金は僅に三千圓許りで、其他は伯爵の爲めに賜つた公債證書がある丈けのこと、却て自刃をされてから後に御下賜の金員や其他で段々と金員が出来まして遂に此方が多くなつたやうな次第でございます、在世中如何に金を使はれたかと申しますと多く學生に貢いでやり、或は書物を拵へて無代で之を人に贈り、或は貧窮者に施し或は義捐に應じて残す所はなかつたのであります而も學生や貧窮者に與ふるに姓名を現さず某人に托し或は無名を以てせられたが故世間には知れなかつたのであります、大將は無駄なことに金を使はぬ詰り金を大切にする人であつたが借金を爲すと云ふ考は寸毫もなかつたのです、是れが人の學び難ひ處ではあるまいかと思ひます、要するに大將は濁を去り潔に就き、利を去つて義に就くと云ふ精神が満身に充ちて居つた人であります。

大將の仁愛 大將が惻隱の心の深かつたことは皆さんも既に御承知のこと、思ひます、殊に戦死者遺族に對する同情心の強かつたこと、云ふものは私が此處で一寸申上げてても到底實際の模様は申上げられませぬ。現に凱旋當時、王師百萬征強虜云々の詩の如きも大將が樂みに作られた詩ではない大將の誠意のある所を述

べられた所の詩で、愧我何顔見父老、眞に其通りであつて、吾々は喜んで凱旋致しましたが大將の意の進まぬ所があつたと云ふのを色々の方面から考へて見ますに決して彼の二人の子供さんを失つたからそれで進まぬと云ふことがあつたのではない、澤山に我忠良なる所の軍人を失い、又此遺族は非常に困つて居るであらうと云ふ其同情心の強かつた爲めであらふと私は信じて居るのであります、その位でありますから大將が遺族の難義して居るものには密に金を贈り、或は日清戦役の際の如きは留守中に夫人をして或地方の遺族全體に金を贈らして居られましたことは確かに私も承知して居りますが、色々にして遺族を慰めることをして居られました、日清戦役後第二師團長で凱旋をされてから後に仙臺附近のもので戦死したものの、所は大概其家を尋ねて居られたと云ふことであります、それは私は知らなかつたのでありますけれども、其當時仙臺の憲兵隊長をして居つた岩井と云ふ中佐が私と懇意でありまして、此岩井中佐から聞きますと仙臺附近の戦死をしたもの、遺族の所に密に行つてさうして誰某が戦死したので定めし跡でも困つて居るだらう、一遍佛様を拜まして呉れ、と云ふて其佛壇に向つて拜み、而して若干の金を包んで香典に置いて戻られた、素より名前も何も申してない斯う云ふ陰徳を施して居られることがあの邊でも澤山あると云ふことであります、もう一ツ岩井中佐から親しく聞いたことを御話すると第二師團の兵卒が病氣であつて將に没せんとするやうな危篤な状態であつた、師團長たる大將は偶々病院を巡視されて而して其危篤の兵卒を見舞い看護に來て居る所の親達を見ると非常に難義の様子で、帶と云つても碌に締めず引割いたものを以て帶に代へて居ると云ふやうな状態を目撃された、それで大將は師團司令部の副官其他の者に一切言はずに彼の岩井と云ふ憲兵隊長にツツと話して、彼の兵卒の看護に來て居る貧窮の親達の様子を調べさせ其状況を聞いて憲兵隊長に金を十圓か

廿圓か其の高は確に覺へて居りませぬけれども、兎に角金を包んで之をどうぞ私からやつたと云はずに去る者から贈つたと云つてさうしてお前の手から渡して呉れと頼まれたと云ふ美談もあります、それから私が信州地方を大將に隨行して歩きました際に松本から諏訪の方に參る途中であつたと覺へて居りますが、或る農村に於て大將と二人で農家に腰を掛けて休みました、然る所其農家の主人が六十餘りの老人であつて他に餘り人が居らぬやうである、況して其老人がどうも病氣のやうで居間の處に寝て居るのです、さうすると大將は態々其方に近寄つて往つてどうか加減でも悪いのかと問はれると、左様でございます私も長い間此病氣をして居りますが子供はないし今日では世話になる者も餘りないので漸く近所の助けを受けて斯の如き状況でありますと申しましたら、ハアさうか、それは氣の毒なことだと云つて居りましたが、暫くすると大將は自分の外套の鈕を取られますから私は側に居つてどうなさいますかと申せば、此鈕を取らうと思ふから君少し手傳つて呉れと云つて外套の鈕を残らず取つて仕舞い、其外套を脱いで彼の老人に持つて往つてやり、是はお前が今薄いものを着て居る其上に着れば暖かくもなるし、又外に出る時には多少の雨は是で凌ぐことが出来るからマアお前の使ひ料に是はやるから取つて置きなさい、斯う云つてやられました、其外に若干の金も包んで其處へ置いてやられました、實に同情心の厚いことは唯今のやうな類が随分御話をすれば多いのであつて感服の至りでございます。

昨年の講演會の講話中に大將の仁が馬にまで及ぶと云ふことがございますが、成程如何にも馬に及ぶと云ふことは御同感であります、私は親しくそれを見て承知して居ります。彼の仙臺で大將が馬子の所に往つて見て來たと話されたのは日清戦役中先刻も申しました蓋平戦の時に大將の馬は臀部を傷けられ私の馬は腹部

を打たれて即座に倒れて仕舞つた、と云ふやうな状況でありましたが負傷をした馬を青森縣の野邊地と云ふ所から大港に行く間にあるヒバル牧場と云ふ所に凱旋されてから後に種馬として送つてやられたのであります、其子が即ち大將の往つて見られた馬子であります、又今一つステツセルから贈つた所の彼の馬であります、が是も凱旋後伯耆の赤崎と云ふ所に牧場を持つて居る佐伯と云ふものによつて種馬とし其子が大將の乗馬となつて最後迄勤め今日では學習院に寄附してございます、而して此馬も伯耆の赤崎に夫人と同行して往き尋ねてやつて居られます、如斯大將の仁は馬にまで及んで居つたのであります、況んや人々に對して大將が誠意同情を以て接しられたことは皆さん御承知の次第でございます、以上御話致しました如く大將は實に至誠以て一生を貫いた人であつて、尙之に強力なる所の義氣と勇氣とを以て修養を積まれた結果彼の偉大なる人格となられたものと私は信じて居ります。

段々時刻が長くなりました、斯く婦人方も澤山御出になつて居られますから少し静子夫人の御話も致したうございますけれど、もう次の御講演の時刻にも差支へますから是で今日は終りと致します。(拍手大喝采)

## 乃木大將の逸事

子爵 小笠原長生

私は、唯今御紹介を得ました小笠原と申す者であります。唯今市長閣下から御話しのありました通り、昨年の本日は、先帝陛下の御大葬儀を行はせられた當日であるのみならず、絶世の偉人乃木將軍及夫人の殉死せられたと云ふ事が、我々帝國民に取つて忘る可らざるの日となつたのであります。それで此の乃木會で講演會を催されるに付て、私にも出席せよと云ふ事でありましたが、將軍の事に付ましては私にも從來諸方から講演の御頼みがあつたにも拘らず一度も出席して居らなかつたのであります。それは自分に少しく考が有つて御断りして居つたので、私のやうな若輩が將軍のやうな偉人の事を輕々に御話をして、萬一にも誤を傳へるやうな事があつたならば、後の思想界に非常な悪影響を及ぼすと思ひましたからであります。

然るに此度は大迫現學習院長からは是非出席して、學習院長としての乃木大將の逸事を御話したら宜からうと云ふ勸告もありましたし、多少調べもつきましたから參上した次第であります。併し今日までに將軍に關する著書も、澤山に出版されて居りますし、諸名士の講演等も數多く有るのでありますのみならず、既に今日も是から石黒男爵、井上博士等の有益なる講演が有るのでありますから、私のは實は所謂蛇足に過ぎない

のであります。であるから成るべく簡單に、一つ二つ將軍の逸事を御話いたすことにとゞめます。殊に私が乃木將軍の知遇を得ましたのは、將軍薨去前數年に過ぎないので、彼の明治三十七八年戰役には、私も滿洲丸といふ船で戰地に參つては居りましたけれども、其當時までは將軍とは一面識も無かつたので、唯寫眞等に依りまして乃木將軍といふ人は、非常に頑固な將軍であると云ふ事を、臆氣に承知して居るといふ位の事でありました。然るに旅順攻撃の悲壯なる戰史……二愛子を君國に捧げられた將軍の誠忠は、不知不識の間に私をして敬慕の念を起さしめたのであるが、未だ親しく面接したことは無かつたのであります。所がそれが凱旋後になりまして、伊東祐磨子爵即ち今の伊東元帥の令兄に當る方の薨去せられました時に、伊東元帥の處へ私が弔詞を述べに參りますと、圖らずも餘所ながら知つて居る乃木將軍が馬で玄關へ來られて居つたが、馬丁が附いて居らなかつたので馬から下りられたけれども、玄關の呼鈴を押して刺を通すには馬を放されねばならないので、さも困つて居られるやうに見受けたのである、そこで私が脇から「私が押しませう」と申しまして、代つて鈴を押したのであります。すると將軍は大層喜ばれて、や、これはと慇懃に挨拶をせられた。其溫情溢るゝ態度は、嘗て私が理想の中に描いて居た乃木將軍其人とは丸で違つて居つて、唯一言でも非常に優しみのある、乃木將軍は斯う云ふ方であつたのかと、實に意外の感に打たれたのであります。それから後色々な動機があつて、一と通りならぬ知遇を辱うするに至つたのであります。將軍としては所謂圓熟時代なので、随つて私が承知して居ります乃木將軍には、奇行と云ふ様な事は一つもない。従て今日私の申上げます事も、好奇心を以て聞かうと思はるゝ御方が御在りになつたならば、恐らくは失望に終らるるであります。絢爛の極平淡に歸したとしても申しませうか、言はるゝ事でも行はれる事でも、決して軌道

を外づれたといふ事は無かつたのであります。換言すると其の觀念は常識以上ではあります。常識以外では決してないのである。唯々餘人と同じ事を言はれるにしても、其一言一行一舉一動が非常に人を動かす力があつて、偉大なる感化を他に及ぼした。これは一に誠心から出るゆへであつたと思ひます。一例を自分の事に付て申上げますと昨年の五月私が海軍々令部員から常磐艦長に轉じまして同月五日東京を出立し旅順に向ひました、丁度其日の朝乃木將軍が告別の爲に來訪せられたのであります。其時に荆妻に向はれて、留守中は公けの事でも、私の事でも何でも心に掛り又身に思ひ餘つた事があるならば、遠慮なく御相談を願ひたい出來るだけは何でも相談をして下さらばお力になります、と言はれた。是は別に不思議な事もないので、誰にしても自分の部下の者が轉じて行く時に、此位の事を言はるゝのは普通の辭令として有るべきことであるのに、今日に至るまで荆妻は其當時の事を言ひ出しては涙を流して居るのであります。斯くの如く非常に感じて非常に有難く思つて居ると云ふものは、其の言はれる事は餘の人と相違はないけれど、誠心が籠つて眞實其の人の事を思つて出るのでありますから、同じ事を言ふのが非常に力があつて、さうして人を動かし又人を服せしむる事と思ふのであります。さう云ふ風に私が今日御話いたします事も諸君が乃木將軍に親しく接せられて其行を見、其の言を聽かれたなら、言ふ可らざるの感動を受けられるのであります。それを私の言葉の上に寫し又文章として御覽になると、言葉や文章を超絶したる將軍の人格といふものが現はれないから、存外平凡で普通の人と違つた事は餘りないと、思はるゝのであります。其積りで御聽を願ひたい。さて、逸事を申し述べるに先だち一言いたしたいのは、諸君も既に御承知であります。乃木將軍は天威の偉人と云ふよりも、修養の力によりて大成せられた方で、こゝが吾々にとりて無上の教訓だと思ふのであ

ります。尤も、所謂無から有が出ると云ふ事は無いので、勿論偉人たるの資格は持つて居られたに相違ないのでありませうが、例の殉死の當時黒岩先生が、「人と生れし神にぞありける」と言はれた如く、殆んど神格までの極點に達せられたのは、主として修養の力に因られたのであると自分は思ふのであります。天成の偉人は勿論尊敬すべきものであるし、又實に國の寶である。併しながら若し其偉人なる者が天成であつて、吾々のやうな平凡な者が學んで達し得られないものとするならば、尊敬はするけれども、吾々の修養の上には大した關係を有さないかと自分は思ふのであります。然るに之れに反しまして、若し修養の力を以て天性に打勝ち、遂に偉人になられた方があるならば、此の如き活教訓は無からうと私は考へて居るのであります。私は哲學や宗教の事は一向存知ませぬけれども、聞く所によると、神道では天地同體とか神人同體とか言ふし、又佛教では生佛不二と云ふ事を主張することである。就中佛教の人生觀の極致として、一念三千なる事を云ふそれを日蓮上人は事實上に現はして、事の一念三千と云ふ事を立てたと聞いて居ります。自分のやうな者が斯の如きことを申し上るのは、定めし片腹痛いと思はるゝでありませうが、此の一念三千と云ふことの要は、人間が只ハツと思ふ心の中にも、佛陀になる心もあれば、畜生になる心もあり、其他餓鬼にでも修羅にでもなる。心即ち所謂十界總てのものが含まれてある。言ひ換へれば天地萬有が、ハツと思ふ一念中に籠つて居る。それを一念三千と云ふと聞きかちつて居ります。其中で最上のもは即ち佛性である。佛性といふと佛臭くなるが、佛とは眞理を覺れる聖、其聖になる種子が色々雑つてる中に存在して居る、之を向上發展せしめて、他の諸種を之に同化して仕舞ふのを成佛と云ひ、其種を本有の佛性と稱すると聞いて居ります。日蓮上人は、あらゆる迫害に打勝ち、漁夫の子が一躍して上行菩薩たる事を示したのは、前述の次

第を實證したのであるが、乃木將軍が修養の力を以て神格までに、完全に大成せられたと云ふことも、即ち哲學的的人生觀の極致を實現せられたので、此上もない大教訓だと私は思ふので、將軍は實に吾々に向つて人間修養の力は、凡夫をして神佛の境界にまで達せしめ得るものだと思ふ、實例を示されたのである。

この事に關して大要を申し述べますと、皆さん方は既に乃木將軍を御覽になつたことがありませうと思ひます。この將軍は背も相應に高く、下腹部は張り出て居られたし、誠に立派な體格で、さうして如何にも丈夫さうに見えて居られた。又六十有餘の高齡を以て、或時は學生と一緒に水浴場へ行つて天幕生活をせられるし、平素も概ね學習院の寮に居られました。其寮といふのは三方硝子になつて居り、一方丈だけが板戸になつて居る。或醫者は斯く云ふ事を云つて居りました。乃木將軍だからあれが耐えられるけれど、他の人がア、云ふ部屋に住つて居つたならば、不斷に四方から色々なものが目に這入るので、始終根氣も心も使ひ減らして了つて、終には氣が違ふであらうと。而して此の室は夏になると西日が差し込む、冬になりませうと誠に粗末な板作りでありますから、根木板が透いて居つて、そこから風が吹き込むのであります。其内に始終居られたのであります。如何にも丈夫な身體の様に皆様御考へでありませうが、何ぞ知らん乃木將軍の身體といふものは悪い所だらけなのであります。先づ天性虛弱の上に左の眼は殆んど見えな、是は十七歳の時に擊劍をして居られる際竹刀の先が這入つたのださうで、唯々眼が開いて居ると云ふだけで殆んど失明でありました。それから左の腕と右の足の尖は鐵砲で打貫かれて居られる。是は十年西南役の時に受けられた創であります。それから耳は性來近い方ではなかつた上に、四十三年の游泳に水が這入つて重い中耳炎に罹られた。其後も充分に回復せられなかつた。それから豈は殆んど總てが入齒であります。其上に激しい僕麻質斯を持

つて居られた。それで能く察に居られても、嚴寒の折などには毎々手拭で鉢巻をして居られる。定めて風でも引かれたのであらうと、我々は思つて居りました。處がさうでなくて、醫者の説を聞くと、僂麻質斯が激しくなると必ず頭痛を伴うて来る。少しく氣候の變化でもあると、其度に起る。即ち將軍のは風邪ではなくして僂麻質斯の激しい爲に頭痛が起るのであると言つて居りました。又是は誠に申し兼ねる話であります。酷い痔を持つて居られまして、少しく遠路でもすると痛んで来ると云ふ位であります。先づ此處に擧げましただけでも七ツの病を持つて居られたのであります。それを修養の力と忍耐の力とを以て押し通し、天性の虚弱に打勝つて行かれたのであります。

次に更に將軍の性質に付いて申しませうが、將軍と友達と云ふよりは、寧ろ先輩とも云ふべき人に日原素平と云ふ方があります。山口縣長府の方で、今年七十八になられ、乃木將軍よりは十幾歳の年長者であります。此方が初て將軍に鐵砲の撃方を教へたのださうであります。が、此人の話に、將軍は生來非常に氣が弱かつたと云ふことである。一體將軍の阿兄さんが二人まで早世せられたが爲に、家族は反對の名を附けると其子供が育つと云ふ諺に因みて、將軍に無人ナキトと云ふ名を附けられた。斯うしたならば却て育つてあらうといふのであるが、其將軍が幼い時餘り泣かるゝので、同じ長屋に住んで居た近所の者が非常に迷惑をして、あれは泣人だと云ふたとの事である。又同輩の子供と遊んでも、何時でも苛められる。甚だしきになると毛利家へ出入をする商人の子供にまで苛められるので、令妹が非常にそれを残念に思つて、或時一人の商人の子供の後から飛び上つて、彼の頭を撲つたと云ふやうな話も有つたと聞いて居ります。又將軍自身の口からも同じやうな事を私は屢々承つたことでもあります。かくの如く身體は虚弱であり、又性質は誠に氣の弱かつた方が

御兩親の教育と師の嚴格なる指導と、第一は自己の修養力から漸次向上大成せられて、偉人となられた方があります。かくの如き氣の弱い方であつたもので、御兩親も大變心配せられまして、丁度將軍が十歳前後の時代に、父上が江戸から國に歸られることになつた時、歸着後生首の曝らしてある野原へ將軍を連れて行かれて、其近傍をグル／＼觀せられた。其時には將軍は顔の色まで變へ、口も利けない位に驚いて居られたさうであるが、嚴格なる父上は更に恐しかつたものと見えて、我慢して歸つて来られると、母上が大きな結飯を拵へて、其の結飯に梅干の赤い汁を塗り付けて、宛も今見て来た首の血潮に塗れて轉がつて居るやうな物を拵へて、サア喰べろと云つて喰べさせ、さう云ふ様に御兩親共に全力を傾けて、精神的にも肉體的にも向上する様にと導かれるし、一方では玉木と云ふ先生が亦非常に嚴格な教育を施された。之に自己の修養力が加つて、御承知の様な方となられた。之が最も大切な點で、教育に當られる方々の忘る可らざることだと思ふのであります。

是から學習院に於ける逸事二三を御話いたします。其前に申上て置きたいのは——是はもう勿論申すまでもない事でありませうけれども——學習院御在學の 殿下方に對し奉る將軍のお覺悟であります。既に前にも申上げました如く、四十三年に中耳炎で赤十字病院へ這入つて居られる時には身體をチョツと動しても非常に痛むといふ有様であつたのであります。が、教授等が病院に参りまして色々な話をする時、談荷くも 殿下の方に及ぶ時には先づ「待て」と斯う言て置かれてさて夫人に扶けられて其ベットの上に起き上つて、正座してそれからなくては決して聽聞せられない、如何なる痛みの時でもその通りで、此の一事のみを以ても、將軍の觀念のある所が明瞭であると思ひます。

一體乃木將軍は、學生特に幼い生徒に向つては、非常に優しいのであります。が併し、言葉と禮儀、此の二つだけは吳々も家庭に於て之を指導して吳といふ事を、屢々父兄懇話會の時申されたのであります。敬虔の念と云ふ事を非常に大事に思つて居られました。殿下の御指導に付きましても、現に學習院には男子部には中學から小學を通じて、皇太子殿下を始め奉り御十三方御出で遊ばされ、女子部には御十方合せて二十餘名の殿下方をお預りになつて居られたのであります。其御一舉御一動に至るまで、嚴密に御注意申上げられました。それでチョツと拜謁される時にも、御目の着け處は如何である御體容は如何であるといふ事を拜察されて、申し上げやうと思ふやうなこともある際には、直ちに御前へ進まれ、是はかく／＼遊ばさねば不可ませぬと申し上げられる、其言語態度といふものは、私共御側で拜見して居りまして、歴史の上に見る昔の忠臣が幼君を補佐し奉るのは、左も斯うであつたらうと思つて、其都度言ふ可らざる感慨に打たれたのであります。次に申上げて置きたいのは、乃木將軍は前にも申上げた通り、總ての事が誠心から出るので、是は今も申上げて宜しいと思ひますが、新聞なり雜誌なりに、義僕とか孝子とか節婦とかいふやうな事が出ますと、必ず或方面から見舞はれ、金員でも惠まれる、將軍が廢兵院へ能く行かれたことは知つて居られる人が多いが、單に廢兵院ばかりではないのであります。

義僕であるとか節婦であるとか、或は孝子であるとかいふやうなものがあることを知られると、自分は少しも形を現はさないで、或方法を用いて必ず多少の助力を與へて居られたのであります。さう云ふ風に誠心から何事でも出ると云ふ爲めでありませう。乃木將軍の行動は非常に相對調和といふ結果を現はして居る。是は實に大切な事と思ひます。例へて見ますと、一昨年、依仁親王殿下に隨ひ奉つて英吉利へ行かれました

が、彼地から歸られて向ふの話をせられる時に、私は益々敬慕の念を深うしたのであります。それは私も色々外國へ行つて見ました人の話も聞きましたけれども、兎角どちらかに偏する、悲觀する人は非常に悲觀して仕舞ふ、又心醉する人は無暗に心醉して、何でも彼でも歐羅巴で無ければならぬと言ふ、昔、漢學に大變疑つて居る人が有つて、本郷から品川へ引越した時に、孔子の國へ二里近くなつたと言つて喜んだといふ話があります、さう云ふ風に何でも歐羅巴を難有く思つて來る人と、又何でも不可いと悲觀して來る人とある。どちらかに偏するの、將軍の觀察せられて私共へ教訓せられた事は、向ふの長所は長所と見られて、而かも我本領を没却しないで彼の長所を探らねばならぬと云ふ事を、始終言はれた。又斯う云ふ事がある。餘程是は大事な事であるが、外國人は日本人の所謂大和魂或は武士道といふ事を熱心に研究して居る。どうかして之れに倣ひたい、それを理解したいと研究して居るが、萬一にも此方では之れに反して、先方の長所を探らず唯々悪い處ばかり採りて、或は邪な思想に染まり、或は贅澤品を輸入すると云ふやうなことになる。國家の憂之れより大なるものはないと云ふ事を、始終言つて居られた。

其他にも種々教訓がありました。又朝に在つて野を忘れず、野に在つて朝を忘れずと云ふのが、乃木大將の本領であつたと思ひます。丁度昨年二月初めでございましたが、静岡の師範學校に木劍體操があるといふのを聞かれ、同月二日の朝でございました、私が海軍々令部に居りますと、將軍が見えて、どうだ今日用が有るかと言はれる、別段用は有りませぬと申しました。それちや今夜の十一時に新橋發の瀛車で立つて瀛車の中で寝て朝靜岡へ着いて、師範學校の木劍體操を見て來やう、一緒に往かないかと云ふ事でありました。それから御供をさせようと言つて隨行し、翌日師範學校を視察しまして、それから沼津へ参りまして、

さうして 皇后陛下の御機嫌を伺ふことになりましたが、其瀛車の内で一々田畑の作物を指して色々な教訓を受けたのであります。其中に斯う云ふ事を言はれた。此農家として最も大切な時は麥を收める時と、蠶の出來る時で、麥ならば約一週間、蠶ならば五六日と云ふ所が大事な所であるから、さう云ふやうな時に充分農家の人々が力を注ぎ得るやうに、當局者は考へて行かねばならぬ。こう云ふ様な事は貴下方は能く考へて置きなさい」と、斯う言はれました。又或時學習院の或生徒が、食事の時に御飯の中に何か汚ないものが這入つて居たと見えて、突然立つて窓から捨たのであります。さうすると食事を仕舞ふと將軍が、其學生を暫くお待ちと呼び止めて、「農家に於て米を取ることは如何に苦心慘憺であるかと云ふことを話して、お前達にはそれがまだ分るまいけれども、米と云ふものは決して塵末にするものでない、若し中に汚い物があつて食べられないとするならば、それを茶碗の蓋の上に取り除けて置くがよい、それを外へ捨てるやうなことをすると、自然と同情といふことが薄くなつて來るぞ」と云つて、懇々戒められたことがあります。斯くの如く凡て誠心から出るものであります。其結果將軍の思想は相對調和と云ふことになつて居る。喩へば國家と個人の調和。理想と實際の調和。理性と情誼との調和となつて顯はれて居る。現今出版せられて居る種々の書籍を御覽になつてもお分りになります。乃木將軍は一面に於て非常に温い、慈悲深い方であられたと同時に一面に於ては、大義名分或は信義と云ふやうなことに付いては非常に嚴格で、苟も之に反するやうな事は決して許さなかつたのであります。而かも寛嚴宜を得て居る。これも一つの相對調和である。又總ての事に付いて將軍の觀察は、常人の觀察よりは必ず一段深い所に着眼せられる。例へば此處に一人の恩人に背き、或は世間を毒する罪人があつて、其事が新聞に出ると、吾々は直に其の罪人は悪い奴だ、恩人に背いた實に

甚い奴だと痛罵し去つて仕舞ふと、將軍はマア待ちなさい、さう評をするものでない、どうして此の者が斯ういふ罪を犯すやうになつたらうかと云ふことを考へてやるがよろしい、而して出來得べくんば何とかして之を善に指導してやりたいとの觀念を、持つ程の仁慈の心がなければなかく、人の上に立つことは出來ぬ。只一圖に罪を犯したから其人を惡むといふやうではいかぬ。寧ろ憐んでやれと云ふのが將軍の觀念で、其慈悲心は殆んど神佛に等しいのであります。

これからお話ししますのは、主として學習院の教職員、學生或は小使等の、將軍に對する觀察をお話しいたします。第一小使の觀察を申しませう。將軍が始めて學習院の寮に來られましたのが、四十一年の九月と聞いて居ります。私共は其時分にはまだ一面識がなかつたのであります。始めて寮が出來て將軍が來られた時に院長官舎と云ふものがありました。それは 殿下方の御休息所に充て、總寮部といふ先程お話をしました三方ガラスになつて、さうして一方が板戸になつて居る、其所を會議室兼將軍の書見でもせられる所に充て其次の室をテールでも置く所に充て、其次を寢室に充てる、即ち三室取つてあつたさうであります。ヌルと將軍が來られて、これは多過ぎる。二室で澤山だ。其一番終いの室は副寮長の部屋に充るが宜い。自分は會議室と次の室の二室で宜いといはれた。ヌルと、まだ九月でありますから蚊が出る。蚊帳の釣手等は總て第三の室にあります。第二の室にはありませぬから、小使がどうしても第三の室にお休寢を願はなければ困りますと云ふと、イヤそれは私に工風があると云つて、小使に向のベットの一方を持たせて、御自分で一方を持たれて、第三の室から第二の室にベットを運ばれ、ベットの枕元に衝立を立て、其衝立の上に鉤があつた、そこへ蚊帳の一方の釣手を掛けて、下の方が斜になつて床にクツ附いて居つて、顔の所丈けが持上つて



居る、そうしてそれから、薬鐘と別に洗面用の水を用意させられた。又學生に對する一方に於ては、無味い物でも何んでも學生に食べさせるといふ習慣を養はれると同時に、一方に於ては、衛生に害のあることは非常に厳しく言はれた。一例を挙げますと、寮中の食事にライスカレーが出来たとある、將軍は此の献立を見られてこれはいけない、少年の腦を刺戟するからライスカレーは食べさせぬがよいと言はれた。其位用意が周到であります。それから寢具も自分で疊まれる。初めはそれを知らぬから、將軍が朝起きられて便所に行かれた留守に、小使が這入つて片付けて仕舞つた。すると歸て來られて、これはいけない、人の寢室に勝手に這入るものではない、又寢具は自分で片付けるから、片付けて貰ふ時には此方から言ふから、云はない時は片付けてはならないと言はれたと、其小使が始終話をしました。それが濟みまして、それから各寮を見廻り歩いて學生が如何なることをして居るか、又少し雨でも降つて濕氣がある様な時に窓を開けて居るものがあると、衛生に害があるから締めろと言つて締めさせられる。夫から、鎌を以て院内を始終見廻つて歩かれ時に粟でも落ちて居ると粟を拾つて來られて、それを無邪氣に机の上に並べられ、小使でも這入つて來ると、此を粟お前にやらう、併し生で食べては毒であるから焼くなり煮るなりして食べろと云つて遣られるのであります。曾て旅順包圍軍の司令官としてあの猛烈な戦をせられた將軍が、學習院長としてかゝる温厚の長者であられたのであります。併し逸話と申しましても決して奇を衒ふと云ふやうなことはないのであります。これを趣味せられたなら其中に云ふ可らざる教訓が含まれて居ると思ふのである。

又或時幼年部の一人の學生が院長の留守に紙鳶を擧げた。其紙鳶が丁度將軍の居られます總寮部の前の電線に引掛つて取れなかつた。それを一生懸命になつて取らうとして居るところへ將軍が、軍事參議會の會議か何んかに出らたて歸つて來られた、すると、頸に一人の少年が紙鳶を取らうとして居る、少年は將軍が來られたから、定めし叱られると思つて居ると、將軍は完爾とせられて吃驚するに及ばぬ、私が取てやらうと云ふて餘所から棹を持って來て一生懸命に取つて居る、どうしても取れない、其内に高等科の學生が一人通り掛つた、それを呼止めて、お前も手傳つて紙鳶を取つてやれと、今度は二人でそれを取らふとしたがどうしても取れない、それから又長い棹を持って來て、三十分も掛つてやう／＼取てやり、其學生が紙鳶を以てニコ／＼して行くのを見て、さも嬉しげに見送られたといふ話があります、實に情誼と云ひ趣味と云ひ、大將の軍服を着た老將軍が、少年の爲に棹を以て一心に紙鳶を取て居られる圖は、これを詩題としても亦畫題としても、言ふ可らざるの趣味を喚起するではありませんか。

それから斯う言ふ話がある。前に申しました通り將軍は中耳炎を煩はれて後は、身體が何となく衰へられたのであります、それにも拘はらず擊劍の寒稽古を一度も休まれない程擊劍には熱心であられた。それで今日の一年祭にも學習院では追悼式を舉行し、目の高等科中學科では、式が終りました後に擊劍と柔道の試合をなし、又四谷の初等科では木劍體操をしたのであります。此の擊劍及木劍體操といふのが將軍の始終念頭に置かれたことなので、殊に木劍體操に付て將軍は斯ういふ事を云はれた。丁度英吉利から歸つて來られてから後であります、日本には固有の擊劍といふものがあるから、これを應用して一面には武士道觀念を養ふの資に供し、一面に於ては體育にもなるやうに何とか工風して見たいと言つて居られた。其内にさう云ふ事をやつて居る學校があると聞かれた。從來、善いことを今聞かれると今研究すると云ふのが將軍の主義であります。少しも猶豫しない、そこで第一番に四谷小學校に參觀に行かれ私も同行しました。尋で麻布の

小學校に行き、静岡に行き、或は大阪に行き、諸方を研究されて、彼れ是れ折中せられて實行されたのが、現に學習院初等科に行はれて居る木劍體操であります。是は昨年四月から實行したので、其の最初の日一方には拵へ付けの刀を置き、一方には木劍を並べて、さて將軍は昔の武士が刀に對する觀念の如何に敬虔の念に満ち、如何にこれを尊重したかといふことを諄々と話されて、さうしてこれは木劍であるが、これを木劍とは思ふなよ、昔の武士が刀を大切に取扱かつたと同じ觀念を以て、取扱へよと言はれたのであります。であるから學生の中に木劍體操が濟んだ後にそれを投げ出したりなどする者があると、其學生に向はれ、お前の考へは違つて居る、これを木劍と思つては違ふ、自分がいつか話した様に、昔の武士が刀と云ふものに對し、如何に尊敬を拂つて居つたかといふことを考へて取扱はなければいかぬと言はれて、木劍體操の時に、一々姿勢から目の着け所を直された。昨年私が旅順に參つて居る間に寄越された手紙にも、毎々木劍體操の經過の様を記されて居つた。其位念頭に懸けて居られたのであります。又擊劍もさうであります。中耳炎を疾まれた後は、青年部の學生と打合ふのは宜くないと醫師が言はれましたので、それだけは止められて、以來は少年の學生を相手にせられたが、誰が面會に来て居らうが、如何なる會議があらうが、其時になると一寸失禮すると言つて出られて、一時間なり一時間半なり學生を相手にして教へられて、再び會議に列するといふ位熱心であられました、従つて寒稽古を一日も休まれぬ。さうして又自室のストープを焚かない、學生の方には蒸氣が通つて居るが、將軍の居室にはストープが置いてある、それを焚かせない、前に申しました通り根木板が薄くて隙がありますから、吹上げて來る風と云ふものが極寒の時には堪へられない、そこで將軍は椅子に寄られ、膝の上に毛布を巻かれて齒切しりをして我慢して居られた。教職員の人々は非常にそ

れを心配して居つたから、私は無遠慮に平素の知遇に委せて將軍に忠告したのであります、すると將軍はそれなら焚く／＼と云はれた、けれども實際は依然として焚かれないで、毛布を巻いて居られる、或時私が不意に其室に這入つて行くと、將軍は慌て、ストープの中に石炭を入れて、私が何とも云はぬのに今丁度火が消えたと云はれたが。斯の如く一方には人の親切を無にしないといふ考へを持って居られた。私は其時に將軍が慌て、ストープへ石炭を燻べられる其様子を見まして、思はず胸が塞がつた、今日斯う云ふことをお話しするの、モウ一つの昔語りとなりまして、言ふ可らざる感慨に打たれるのであります。

それから將軍が赤十字病院に入院中のことであります、初等科の生徒が將軍に見舞狀を差出したと云ふことを教員に頼んで來た。當時將軍の中耳炎も治り掛けて來たものでありますから、モウ見舞狀を出しても宜からうとのことで、十名位づゝ二度に分けて出した。將軍はそれを一々見られて、昔から用ゐ來つた返りを間違つて使つて居る所や、字違ひや假名違ひを一々直して返された。一體將軍は、非常に本を讀むことが早い方でありませぬ。大概千何頁といふ本を十數日で讀んで仕舞う。讀まれれば必ず誤字等を正される。又意見があればそれを加へる。此の席にも有馬文學士が居られますが、學習院の教授で其邊の事はよく知つて居られますが、如何なる雜誌でも龐末な本でも、寄贈を受けたものは必ず目を通さぬことはない、目を通したならば必ずそれに間違でもあれば其間違を正し、將軍自身の意見に合はなければ其理由を記入される、又會心の説でもあると喜んで愉快な評を書かれる。どんな詰らぬ雜誌でも、受取たものは柵に投つて置くやうなことはなかつた。それから音讀されるのが將軍の癖であります。尤も學習院では學生の溫習時間には音讀を禁じられて居りますが、將軍の自室では差支ないことになつて居るもので、時には朝々と音讀せられること

があつた。教職員始め私共まで今でも其窓下を通ると、ともすると其聲が聞える様な心持があるのであります。どう云ふ譯で音讀をせられるかと云ふと、音讀には二ツの利益がある。一ツは自分の觀念に入れ、一つは自分の聲が自分の耳に這入つて、人から讀んで聞かされる様に、二度一ツ事を研究する様な利益があるから、音讀はよいものであると言はれた。實に讀書は將軍の娯樂の主なるもので、曾て狂歌を作られた中にも擊劍と朝飯と讀書を三ツの楽しみに數へて居られます。

前々より申した如く、將軍は一方では非常に嚴格でありまして、或點に至ると、苟も許されなかつたのでありましたが、一方に於ては非常に慈悲深いと共に、更に洒脱な方でありまして時々面白い話をされる、時に笑はざるを得ない様な話をされる、曾て片瀬の水泳所で天幕の中に居られた際、或學生が参りますと、君等に落し話をしやうと言つて、かう云ふ話をせられたと云ふことがある、或る所に鶴を描くこの大變巧い畫工があつて、鶴を描くことは自分に限ると云ふて得意であつた、所が其弟子が始終先生の側に居つて之を見て、成程先生の描く鶴は巧い、自分もどうかしてア、云ふ風に書きたい、それにしては寫生をする必要があると思つて、或時に田の畔に行つて待つて居ると一羽の鶴が下りた、其時に鶴を見ると先生の描くのは大分違つて居る、それを寫して來て、先生あなたは鶴を描く事は名人と思つて居ましたが、今實物を見ますると大分違つて居ります、これはどういふものでありませうと云つたら其先生が、イヤお前の見た鶴の方が未熟なのだと言はれた。己惚も此處迄至ると一種の面白味があると言はれたさうです。それから又斯う云ふ話をされた、或國の王様が病氣をした、其國の侍醫だけでは心細いので、他國からも醫者を呼ばれた、其醫者の名前は、マッケンジーと云ふ醫者であつた、さて診察の結果手術をやらなければいけないと云ふと、其國

の醫者は、他國の醫者がそんなことを言つたつて、手術をしなくても宜いと言つて、議論になつた、どつちが勝つたらう、此所迄話せば分るだらうと云ふて、大笑せられた。思ふに、マッケンジーと云ふ名だから、其方が勝つたと云ふ落ちなのでありませう。又或時、軍事參議會が何かあるので忙しい時に目の學習院の官舎を出て、停車場に行かうとせられた時に某學生と一所になられた。目白停車場に行くには踏切を越へて行くのでありますが、其踏切迄來ると電車が來たので、將軍は通行券を持つて居られたので、番人に聞いて見られた所が、宜しうございますから此の中をお通りなさいと言つたので、急ぎの用であつたから線路を通つて電車に乗られた。さうすると其學生は普通の道を通つて切符を買つて乗らなければならぬから、外を廻つて行くあひだ間に合はず、將軍だけ行つて仕舞つた。すると其晩將軍は其寮で學生を集めて、かう云はれた。自分は今日實に濟まない事をした、自分が急いで居つた爲めに、番人が宜しうござぬと云つたのツイ釣込まれて、線路を駈けて行つて乗つた。然るに學生は外側を廻つて、ちやんと乗つた。それは實に學生の方が正しい、番人は宜いと云ふ權利はない、若し此の際驛長からでも何故あなたはこんな危険を犯さないましたと言はれた時に、番人が宜いと云つたから來たといふことは言ひ譯にならぬ、誠に武士として不たしなみのことであつた、耻を搔かなければならぬ所であつた、學生は外を廻つて行つた、自分は其學生に及ばなかつた事を謝さなければならぬ、人間といふ者はどうかすると、不圖人の言葉に釣込まれて、横道に這入り易いものであるから能く氣をつけねばならぬと、訓戒を垂れられたことがある、是等は實に味ふ可き話と思ふのであります。斯う云ふお話はまだ澤山あるが限りがないから、今一ツ二ツで止めます。將軍は總てのことに慈悲と云ふことが行渡つて居る。水一滴でも紙一枚でも、これを鹿末にすると云ふことをせら

れない。又一本の木一枝の花に對しても、深い同情を持って居られた。これも片瀬で游泳中の話でありま  
すが、或幼年の學生が河原撫子の花を取て、おもちゃにして捨てた、それを將軍が見て、其學生に向はれ、  
無暗に花を捨てるものではない、それを取つて花活にでも入れて楽しむと云ふのなら宜しいが、無益にち  
ぎつて捨てるものでない、此の花については古來幾多の詩人歌人が、詩歌にも作つて居る、天の時を得て此處  
に咲き出したのであるから、これを取て無益にちぎつて捨てること云ふのは、誠に無慈悲であるから、さう云  
ふことはしないが宜しいと言はれた。一木一草に對するにも同情が斯くの如く深かつたのであります。

また此外に澤山お話する事がありますが、丁度一時間と言ふお約束の時間になりましたから、これで講演を  
止めますが、終りに臨み申したいのは、昨今將軍の薨去せられたのは、私は、肉に死んで靈に生きられたも  
のと思ひます。將軍の死は決して死に非ずして、所謂方便として涅槃を現はすといふのであつて、將軍の肉  
に死なれたと云ふ事が寧ろ靈として千萬年に活現し、以て此の皇國を守護せらるゝこと、信じて居ります。  
尙一ツまだ世間に知られて居りませぬ將軍の歌を、御紹介致しませう、これは四十三年元旦に將軍が熱海と  
修善寺の間の弦卷山といふ所を通られた時、詠せられたものであります。

あなたふと弦卷山の朝げしき

東に旭西に富士ヶ根

如何にも雄大であつて、又崇高で、此の歌は直ちに移して將軍の人格を想はしめるのである、此歌を以て今  
日の講話の終りと致します。(拍手)

乃木將軍之高詠

王師百萬征驍虜  
野戰攻城屢作山  
愧我何顏看父老  
凱歌今日幾人還

## 奉天戦中に於ける乃木大將

陸軍中將 河 合 操

私は乃木大將の配下たる事前後二回である。其第一回は大將の臺灣總督にあられた時の參謀であつた。次は日露戦役の際乃木大將の指揮せられた第三軍の參謀副長を務めたのである。此間大將から受けた所の感化は實に偉大なもので、然も之れは軍人は勿論何人としても守るべき所謂金科玉條であつて、私にとり終生の最大名譽とする所である。而して其事柄を詳細御話する事は一朝一夕にして盡すことは出来ないのである。大將の言行は終始一貫して居るから、無論人が變り場合が變るにつけ多少異つて現はれて居るが、之を證し詰めれば全く同一に歸着するのである。今、之を更に分解し分類して、精神修養の資に供するならば多大なる利益があらうが、それは私共の逆も充分に企及し得らるる所でない。故に此事は學者諸君に御願して、今日は單に奉天戦中に於ける大將に就て同一の種類に屬する二三の事實をお話しようと思ふ。併しこれには第三軍の行動の概要を添へて話す方が、却て分り易いと思ふから、多少長くもなるが其概要を付加へる事に致します。

大將は既に諸君の御承知の通り、最初彼の南山の戦に於て長子勝典君を失ひ、更に旅順の戦に於て次子保典君を失はれたが、當時將軍は其葬儀は自分のと共に三人揃つた後に行へと、書面にて夫人に書送られたのである。それから薨去の際に書遺されたもの、中にも、彼の明治十年の西南役で軍旗を失ひ 陛下に對し奉

り誠に相濟まない爾來申譯の死所を尋ねて居つたと云ふ意味の事があつたが、是亦既に諸君の飽迄知らるゝ所である。其他大將が此種の事を多數の詩歌等に顯して居らるゝが、殊に其顯著なるは、將軍が凱旋間近に作られた『皇師百萬征強虜、野戰攻城屍作山、愧我何顏看父老、凱歌今日幾人還』の如きは、大將の其偉大なる御精神及意味ある御胸中を表はしたものであると思ふ。

心配に堪へぬ一事 愈々旅順も陥落し、奉天方面の戰機漸く熟して我が第三軍の前進の一日も速かならむ事を促して居る。そこで第三軍は萬難を排して前進を起し遼陽附近に集中したのであるが、此頃吾々が最も心を悩ましたのは何かと云ふと、大將の御心中である。露骨に言へば、大將は或は奉天戦に於て死所を選ばれるのではなからうか、是が最も吾々の心痛した所であつた。勿論大將は少しも左様な氣色は見せられないが、旅順の戦鬪に半歳を費し、其間數萬の 陛下の赤子を失つて居られる、さうして此事が常に大將の念頭より離れないと云ふとは能く分つて居る。それ故或は何等かの覺悟を有つて居られやしないかと、吾々幕僚は非常に心痛したのである。所が遼陽に到着した後にもなく塚田大佐、當時中佐であつたが此人が軍の高級副官となつて東京から新たに赴任して見え、其當時東京に在る或大將の親友たる高官から傳言を依頼されて來た、それは『何卒乃木を殺して呉れるな』と云ふことである。言葉は誠に簡單であるが今更の如く深刻に私の胸底に響いたのである。さうして如何にしたら此負託を完うすることが出来るだらうかと、益々心を苦しめたのである。是から奉天戦中大將の行動が如何に吾々の眼に映じ心に響いたか、又吾々が之れに對して如何に苦心したかに就て述べて見ようと思ふ。

陣中の不祥事 第三軍が旅順を後に奉天方面に向つて出發した時より奉天戦開始に至る迄の間に第三軍に

は不祥事が頗る多かつたのである。勿論策戦上の困難は多大であつたが、其れは別として其不祥事と申すは單に人事のみのであります。第三軍司令部が旅順を出發して遼陽に向つた日は非常なる寒さで然も司令官の乗られた車はと言へは處々硝子がなくて、風は強く車内でも實に寒威凜烈肌を刺し身を斬られるやうであつた。現に金州の手前に行つた時に、機關車が凍りついて進行しない、依て之を温めて溶すと云ふ有様であつた。それから辛うじて遼陽の手前の沙河、是は沙河戦の沙河ではない、此處に行つた時に列車が橋の上に乗つて、北岸の給水場から機關車に水を入れたのであるが、其時軍の參謀長たる小泉少將は列車が停つたので運動でもされやうとしたか、或は便所へでも行かれやうとしたか、兎に角列車から降りると、忽ち二間有餘の河底に墜落した。それは詰り寒氣が甚しくして身體が自由に動けなかつたのと、今一つは白雪が上にも下にも積つて居つて、地の高低が分らなかつた爲であつたらうと思ふ。兎に角大變に負傷をされて、直に遼陽の病院に入れたが、急速に治癒の見込がないと云ふので後送することになつた。大會戦を目前に控へて、良參謀長を失つたのは甚だ遺憾である。それより數日を経て第三軍に屬したる、第一師團司令部が遼陽に着した其日、大將は師團長たる松村中將閣下を招いて、簡單なる會食をされたが、元來中將は酒の強い人で其日も相應に召上つて、酩酊定められたる師團司令部に歸られたが、夜半腦溢血の爲に、唯一聲の唸聲と共に此世を去られたのである。それから二月下旬、小北河附近から軍が奉天に向つて前進を開始する少し前になつて、前にはすつと旅團長で非常に勇猛な——私は敢て勇猛と云ふが、松永中將、當時の少將、此方が新たに軍の參謀長になられたが、如何なる譯か又しても此方が黃疽と云ふ病にかゝられた。併し固より元氣な人であるから、毫も屈する色なく常の如く軍の計畫に參與せられたのである。所が更に一大事は大將御自身

が丁度出發の二、三日前より病氣に罹られて非常に發熱せられた事である。私の申す不祥事は以上の事でありまして大に吾々の神經を悩ましたのであります。

出發一日前松永參謀長は私を招いて、自分は新たに參謀長となつて不馴である所へ、不幸にも病魔に冒され、充分なる働きは出來ぬであらうと思ふ、どうか宜敷頼むぞと云ふ御言葉であつたから、私は宜しうござります、大體の御指圖さへして下されば、幕僚を統率して御負託に報いませうと御答へして、更に私は其時參謀長に向つて、實は吾々幕僚は今後に於ける大將の御身に就て頗る疑懼の念を懷いて居ます、殊に東京の某高官から大將を殺して呉れるなど云ふ傳言を受けて居ますが此事に就て如何にせば宜いかと、非常に頭を悩まして居る次第であります、殊に大將の御氣質として、吾々風情が申上げても或る場合には御聞きにならないだらうと思ふ、どうか吾々の手に合はない時は、然るべく閣下の御配慮を願ひたいと申し上げたら、參謀長も、宜しい其事は確と自分が引受けたと、快く引受けて下さつたのである。所が愈々軍司令部出發と云ふ前夜になつても大將の熱は下らない、無論大將は少しも病氣の様子を見せられない、見せられないが體温器は嘘を言はない。そこで吾々は切に静養せられむ事を希望したが、どうしても承知せられない。軍醫部長も病の危険なるを説いて、頻りに御止め申したが頑として承知されない。どうも仕方がないから、それならば明日だけ支那馬車で御出發を願ひたいと申したが、是亦承知されない、そこで如何とも仕方がないから、明日此熱を冒して出發されるれば御生命に關しますと云ふことを、軍醫部長から進言せしめた。さうすると大將は翻然として、然らば明日は馬車で行かうと言はれたが、此事は大將の御氣質の上から意外に感じたと共に又深く大將の御心の中を御察し申したのである。大將が馬車で行かうと云ふ御考へになつたのは、心中深く

期して居られた點があるからではあるまいかと、吾々は更に警告し合つた次第でありました。孤軍奉天に直進せん。そこで軍の先頭部隊が前進を開始したのが二十七日、軍司令部が小北河を出發したのが二十八日であるが、其の二十七、二十八日は敵の騎兵を驅逐しつゝ、渾河と遼河の間を進むで、三月一日には一番右翼の第九師團、即ち金澤師團が、渾河の右岸にある四方臺と云ふ所の敵の陣地を攻撃し軍司令官は共直屬の砲兵旅團をして之を援けしめる、夕刻迄に四方臺を占領し、此日を以て軍は總司令官の定められた策劃計畫上の第一の目的線即ち大民屯から小民屯に亘る線を占領した。此線は丁度出發した地點から奉天までの中間で、軍は奉天に向て正面する様になつたのである。軍司令部は昨二十八日には阿司牛、此日は千家臺と云ふ所に宿營したのであるが、夜になつても總司令部との聯絡がどうしても取れない、即ち電信も通じなければ電話も通じないで非常に苦心した。何故是等が通じないかと云ふと、元來第三軍の持つて居る電線は旅順に於て長い間雨雪に晒されて損傷を來して居る其上に當時は所謂露探なるものが澤山に居つて、諸所で電線を切斷する、それが爲に夜に入ると總司令部との聯絡が全く取れない、従つて滿洲軍の全體がどうなつて居るか、少しも分らない。此に於てか大將は一大決心をせられたのである。今述べた通り總司令部との聯絡は全く取れない、従つて總司令官の指揮を受ける事が出来ないと言ふ様な場合に、適當に軍を仕向けると云ふことはなかく、むづかしい事である、殊に第三軍は旅順に於て長く惡戰苦闘をしたので兵も大に減少し、未だ其補充が出來て居らない。軍は三個師團と後備歩兵一旅團半、騎兵一旅團、及砲兵一旅團から成りて可なり大きくはあるが、其戰鬥人員は僅に四萬五百人、斯の如き少いものであつたのである。而して最初は第三軍が前進を開始すれば、必ず優勢なる敵の騎兵に妨害され、又目的地點たる大民屯小民屯の線、其線

に行く迄には優勢なる敵に遭遇して、戰鬥をしなければならぬと覺悟をして居つた故に、自然と後方のこと、即ち糧秣、彈藥等の運搬の道も充分に付くであらうと考へて居つた、所が豫期に反して敵の優勢なる騎兵は、我が挺進騎兵の爲に北方に抑留されて思ふた程居らなかつた。又優勢なる諸兵聯合の敵に遭遇するならんぞ考へたが、是にも遭遇せずして第一の目的地點に達したのである。而して總司令部との聯絡は取れないが、第二軍其他の諸軍は前日來熱心攻撃に従事して居るが、少しも進歩しないと云ふことは、大概推察が出來たのである。此に於てか大將は誠に冒險的ではあるが、第三軍の運命を賭して孤軍奉天に直進すると云ふ決心を爲されたのである。然るに敵の状況も分らないのみならず、又あの邊の地圖もない、あつても僅に百萬分の一の輿地圖で、従つて部落の如きも名稱が違ひ又所在が違つて居る。斯の如くであるに孤軍敵に向ふと云ふことはなかく、困難であるが、大將は甘じてそれを實行しやうと御考へになられたのである、其時に大將は我々幕僚に向ひ各自の意見を御尋ねになつたのである。而して吾々は、大將の決心には誠に敬服すると共に、一方に於ては非常に懸念したのである。今も申す通り是は冒險的の仕事であつて、糧食或は彈藥が續きさうもない、それにも拘はらず一大決心を以て之を執行しやうと云ふのであるから、一時は皆互に顔を見合はしたが兎に角大將の決心が適當であると云ふので、皆是に同意を表した。さうして異口同音に其成否は御請合は出來ないが、第三軍が最後の一人迄戦たならば、假令第三軍は茲に全滅すると雖も、必ずや滿洲軍全體の得る利益は多大でありませう、どうぞ充分の御覺悟を以て御やり下さいますやうに、さうして若しうまく行かなかつた時は、願くは御快く御腹を召せ、吾々幕僚も必ず御供仕ります、斯う申上げると大將は笑を含まれて、大に吾が意を得たりと云ふ風が見えましたが、後で吾々はアアしまつた餘り強く申上げ過ぎたと

却て心配したのである。どうか此邊は宜しく御推察を願ひたいのであります。

初めて優勢なる敵に逢ふ。それから第三軍は愈々前進と決し夫々命令を下されたが、夜半になつて第九師團の電信隊が、裸線を地上に引ばつて軍司令部の所在地に來た、是が爲に漸く總司令部との聯絡が付いた。そこで早速電話を掛けると、第三軍が出たきりで、其後はどうなつて居るのか少しも分らないと云ふて非常に心配されて居らるゝ所であつた。そこで互に状況を通じ合ふと、果して他の軍は熱心に攻撃をして居るが更に効を奏さないと云ふことが分り、又第三軍が孤軍奉天に向つて突進すると云ふことは頗る冒險的であるを心配されたが、乃木大將の決心頗る堅く、且つ既に各師團に命令を發したので又如何ともすることが出來ない。そこでどうか充分注意して無理のないやうにして前進せよと云ふことで、此に於てか其計畫も公然のものとなつたのである。話は少し前に遡るが、初日大將は馬車で阿司牛と云ふ所に着され、其翌朝になると幸にも熱が取れた、併し豫後が心配であるから、是非もう一日馬車で御進軍を願ひたいと申ししたが、もうどうしても聞れないで、遂に馬上の人となつて司令部の先頭に立つて前進されたが、是に反して松永參謀長の病は漸を追ふて重くなつた。併し元來勇敢な人であるから御自分の仕事は少しも休まれなかつたのである。愈々三月二日には第三軍は白皚皚たる雪を蹴つて奉天に向つて出發したが、其時最右翼に在る第九師團は、第二軍の左翼に連つて前進する事を命じ、其残りの軍を提げて前進されたのである。それ故其兵力は益々少くなつたのである。さうして其日の午後沙岑堡と云ふ所、是は奉天を距る事西約四里ばかりであるが、其處に行つて初めて優勢なる敵に遭遇して、眞面目に第三軍主力の戦闘を開始したが、其戦闘が開始されると、後方に在つた軍司令官は一氣に馬を飛ばして、第一線に行かれ、さうして沙岑堡の傍ら、一町ばかり離れた南の處

に小さい墓場があつた、其墓場に夕刻まで居られて軍の統帥に任せられたのである。然るに此戦闘は遅く開始された爲に、其日に決を告ぐるに至らずして日が没したのである。そこで大將は其夜沙岑堡に宿營すると言出された、此沙岑堡は此邊でも一番大きな部落で、露軍が糧秣其他の集積地にして居つたのである。所が露軍は是が我が軍の手に入る前に悉く火を放つたので焔は燄々として天を焦し、頗る物凄く有様であつたが大將の御氣質として左様な所を避て他に行かうとはされぬ、其中を目標けて宿營しやうと云はれる。此際吾々が御止申した處で御聞入にならないのは分つて居るから直に監理部長を村内に入れて設營を命じた。監理部長等は無論彈丸飛來しつゝある中に設營をしたのであるが、其時第三軍司令部附たる三等獸醫森清克と云ふ人が、監理部長と共に設營に従事中敵彈の爲に丁度彼の山岡中佐と同じ所を打たれて、其兩眼を盲した。工合は少しも中佐と變らない。漸く設營が出来て、一同村内に入り、吾々は翌日の計畫をして居つた時に、大將專屬の副官が私の所に來て、大將の居られる部屋にはのべつに小銃彈が来る、それ故外に御移り下さいと申しても御聞入れがない、如何にしたら宜うございませうかと云ふ、そこで私は直ちに、幕僚は今參謀長と共に明日の計畫をして居ります、略ぼ其計畫も立ちましたし、丁度適當の處に地圖も開いてあつて都合が宜うございますから、此方に御出でを願ひますと申させますと、大將は間もなく吾々の部屋に來られた、吾々の部屋は敵に面して大きな圍壁があつたから安全であつたが、斯の如くに大將は、如何に彈丸が來やうとも何が來やうとも泰然自若として、何か相當の理由がなくては決して動かれなかつた。

夜半に軍司令部の移轉 其内に日が全く暮れて一時間も経つたかと思ふ頃村の周圍に營つて盛んなる銃聲が起つた。何事ならんと幕僚の一人を派遣して調べさせたら、敵の斥候が侵入して第三軍司令部の小行李―



—小行李といふのは吾々の副馬とか荷物とか云ふもので、それが宿營すると後から従つて来るのであるが—  
—其小行李が沙岑堡に到着せんとする時、突然前面に敵の斥候が現はれたので、其小行李の護衛兵七八人がそれを射撃をしたが、所謂一犬吠を吠えて萬犬實を傳るとは此事で、其傍にあつた後備隊が更にそれに向つた爲に、意外に大きくなつたのであるが、其時は吾々も大に膽を冷したのである。と云ふのは夜は全く戦闘力のない砲兵旅團が其處に居るので、若し夜襲でも掛けられたのなら大變な事になるからであります。漸く其原因が分つて安心をしたのである。併しそれが爲に吾々の馬などは翌日になつても、主人の許に歸らぬものが澤山あつた。先づ左様な譯で夜通し騒ぐと云ふ有様であつたが、兎も角も十時頃になつて略ぼ翌日の命令も出來、それ〴〵命令受領者に渡して、幕僚の仕事も一段落を告げ漸く煙草を手にしたが、實際斯様な位置に居つては軍の統帥は出來ない、少くとも幕僚の仕事は出來ない、大きな司令部になればなる程冷靜な頭を以て計畫しなければならぬ。慘憺たる修羅の巷が眼に見えては、凡庸の人間には良い考は出來ないものである。と言つて此處から後に退ることは大將の御認可を得る事が頗る六ヶ敷考られたが、其時私は獨言のやうに大きな聲をして、あゝ斯う云ふ所に居つては逆も幕僚の仕事は出來ない、困つたものだ、と云ひますと鋭敏なる大將は直ぐに此事を察せられて、然らば今より後に退がらう、何處へでも行かうと言はれた。其時が丁度十一時前であつたが、それから設營の爲に副官を後方に派遣して、約三四基の胡臺と云ふ所に入つて、其處で初めて雑炊を煮て漸く飢を凌いだのである。其夜の中に其處に移つたのは誠に好都合であつたのである。若しも翌朝まで沙岑堡に居ると飛でもない事になつたかも知れないのである。と云ふのは其翌朝になると、非常な優勢な敵が襲撃して來て爲に沙岑堡は全く彈丸の巢になつて仕舞つたからである。

併し此日の戦は見事に敵を撃退したのである。茲に於てか若し前の小民屯大民屯の線に於て、準備の整ふのを待つて居つたならば、敵は反對に着々準備を整へて先づ第三軍を撃破すると云ふことになつたかも知れぬ。然るに大將が大決心を以て敵に準備の時機を與へず猛進せられたのが非常な利益でありし事が明かに知られるのである。此日の戦は誠に愉快であつたので、第三軍の兵卒の如きは一同に旅順の戦即ち要塞の戦に比して野戦は何でもないと云ふ感念を持たせて、大に志氣を振起せしめたのであります。さうして尙騎兵の秋山旅團長が左の方で新民府附近より奉天に向つて退却する諸兵連合の敵と出會して之を潰亂せしめた等、此日は實に第三軍に取つて多幸なる日であつたのである。

軍司令官の苦心 其翌日即ち三月四日には總司令官より第三軍の前進を一時中止すべく命せられた。と云ふのは第三軍が餘り進み過ぎて居ると、第二軍が其頃敵の右翼を敗りて漸次敵を席捲して第三軍の右に並ぶ事が出來る様になつたから、それと相俟つて前進させやうと云ふ總司令部の計畫で、それが爲に一日前進中止を命せられたのである。翌五日は又々前進して、軍司令部は後民屯と云ふ所に前進し、其第一線は大石橋、李官堡、張士屯の線、是は奉天を距る事僅に二里ばかりの所であるが、其處まで押付けたのである。所が其線には敵が豫め堅固なる工事を施して置いたので、終日戦つたがなかなか取れないで矢張り其日の戦闘も日の没すると共に其儘になつたのであるが、其時は第九師團も第三軍の右翼に到着して、直接乃木大將の指揮の下に歸つたのである。所が第二軍が追々前進して其展開する餘地がないと云ふので、第三軍はずつと北の方に移つて、第二軍に餘地を與へよと云ふ、總司令部より命令があつた。而して是も敵を前に持つて居らない時なら何でもないが、既に敵と戦ひつゝある時に引上げて左に移ると云ふことは、戦術の上から言つても

なか／＼困難で容易に出来ることでない。然るに大将は巧みな方法を採られて其目的を達しられたのである。即ち一番左に居る第一師團の方には、それ程敵が居らないから、之を先づ北に廻はして、真中に居る第七師團は敵を前に控へて居るから其儘にして置いて、第九師團を引抜いて、夜の中に第七師團の後方を通して、元第一師團の居つた所に竝込んで、さうして新たに第二軍の第三師團を入れると云ふ様にせられたのである。是はなか／＼むづかしい運動である。然るに翌六日になると敵も此様子を知つたものか、奉天から新民府に通ずる大街道上に大石橋と云ふ所があるが、其前には僅に第七師團の左翼の兵が居つて、之れが優勢な敵に攻撃されて誠に危急に迫つた。折柄朝早く第九師團長の大島中將が幕僚を率ゐて、師團に先立つて大石橋に到着して、前方を見らるゝと第七師團の左翼隊が今や苦戦最中、正に堤防が缺潰しやうと云ふ有様、併し御自分は到着しても手に一兵もない、そこで之を軍司令部に報告して来た。丁度其時軍司令部は既に大石橋の後方馬三家子と云ふ所に到着して居たので、大将は直に其地に到着休憩して居る野砲兵旅團に警急集合を命じ、駈足を以て大石橋に派遣し、敵の攻撃を喰止める事を命じ、更に其處に到着した後備旅團をも其方面に出し之を第九師團長の指揮下に入れられた。所が幸ひにも一戸將軍の指揮された第九師團の前衛が、實に間髪を容れない場合に大石橋に着いたので、漸く敵の突貫動作を喰止める事が出来たが、實に危急存亡の場合であつた。然も其場合に於ける大将の沈着せられて毫も時機を失せず着々處置せられたるは敬服の外ないのである。それから翌七日も盛んに敵を攻撃したが、優勢なる敵が前面に居つたので、各師團共大に力を盡したがなか／＼効を奏さない。さうして第三師團の向つた李官堡では、第一線に進んだ第六聯隊の如きは、聯隊長を始め殆んど全滅し某大隊長は腹を切て死んで居る。斯の如き有様で之れに連繫して居つた我が第三軍の右

翼たる後備旅團も其餘波を蒙り、一部分潰亂して、旗手少尉の如きは血だらけになつて軍旗を擁して軍司令部に駈込み、旅團長はサーベルを抜いて退却する味方の兵を斬ると云ふ有様で實に慘憺たるものであつた。而して終日努力したが終に奏効せずして夜に入つたのである。すると其夜總司令部より第三軍の今日の戦闘は鈍い、もつと確つかりやらなければいかぬと云ふ様な激勵的の御注意が在た。併し是は第三軍の攻撃が必ずしも鈍いと認められた譯ではあるまいが、既に敵の左翼即ち我第二、三軍の方面に於ては敵を奉天間近く迄押しつめて居るが、第四軍、第一軍、及鴨綠江軍の方面はどうしても動かない。そこで第三軍は既に奉天の西北方に迫つて居るから、早く前面の敵を打破つて、奉天の北に突出する事が何より必要である處から、總司令部は一層第三軍を激勵すべく注意せられた事と思ふ。而して此注意を受けた軍司令官は、直ちに其事を部下一般に訓令せられたのである。さうすると部下の激怒する事頗る烈しく、是程力を盡して居るのに尙不足を言はれるか、此上は悉く死して軍司令官に申譯をするより外はないと云うて、志氣の振ひ方と云ふものは實に激しく、今尙想像するに餘ある位であつた。

軍司令官自ら戦線に出でんとす。翌八日も矢張り朝から戦闘を開始し盛んに攻撃したがなか／＼動かないのみならず、砲弾は軍司令部所在迄も飛んで来て豫備隊に命中すると云ふ有様であつた。すると丁度八時か八時半頃になると、大将は私に向つて、ちよつと其處まで行つて来る、馬を出して呉れと言はれた。此時私の胸は異様な閃に打たれ、ハツと思つたが、それはいけません、今は第三軍の危急存亡の時でございます、此際軍司令官が此處を御動きになることはいけません、今は誠に大事で、一刻も司令部を御離れなされてはいけません、と申上げたが、大将は頗る平氣で、イヤちよつと其處まで行つて来る、と重ねて言はれた。私

も大将の御氣質は能く承知して居るからもう此上何を申上げても駄目だと考へ、重ねて言はれた時に唯「いけません」を繰返して他を言はなかつたが、私の腹の中はひや／＼して居たのである。此時耳には砲聲を聞き、體は病魔と闘ひつゝ、室の一隅に横臥して居られた松永參謀長は、やをら身を起して大将に向ひ、唯今河合の申上げた事は最も至極でございます、司令官が此際此處を御離れになつてはいけません、どうしても閣下が御出てならなければならぬのなら病氣ではございますが私が御代理を致しませう、斯う申上げられると、大将は暫く首を垂れて考へて居られたが、聴て徐ろに口を開いて、然らば御氣の毒であるが貴所に御願ひしやうと言はれた。是で吾々は漸く胸を撫下したが、更に又參謀長の身を氣遣ふ事になつたのである。參謀長は恰も病の身に在るを忘れたるが如く、直に馬上の人となつて出て行かれたが、大将は此時參謀長の影の見えなくなるまでちつと見送られ、兩眼には涙を湛へて居られたが、此光景は今尙眼前に見るが如くである。而して大将が最初私に向つて、ちよつと其處まで行つて來ると言はれたのは何の爲であらうか、勿論私も御尋ねしない、亦參謀長も何の爲に何處に御出でになりますかと御尋ねもしないで私が代理を致しませうと申上げ、大将亦何を頼むとも言はれないで、然らば御氣毒だが御願ひしやうと言はれる、ちよつと聞いては何が何だか少も分らないが、茲には一の確乎たる暗示があるのである。兩將軍の間、又私にも充分に分つて居るのである。それは何かと言へば、即ち第一線に行つて軍を激勵すると云ふことである。參謀長は馬を飛ばして戦線に出らるゝと、皆參謀長の病氣を前から知つて居るので、師團司令部に行つても旅團司令部に行つても、君は軍の參謀長でありながら、此場合司令官の側を離れると云ふことはない、早く御歸りなさいと、到る處で言はれた。それにも拘はらず多少戦線を廻つて歸られたが、それ以來病は更に重り、愈々

重態となつて、其翌日からは全く何事も出来なくなつたのである。斯の如き有様で其日の戦闘は随分困難であつたが、幸に着々各方面とも攻撃効を奏して、最左翼の第一師團は奉天の北方北陵の附近で鐵道線路に沿へる三臺子と云ふ部落まで敵を追詰め、第七第九師團もそれ／＼緊要な部落を占領して大に攻撃の歩を進めたのである。

危険なる戦況 翌九日は非常なる暴風で、所謂黃塵萬丈咫尺を辨せざるの有様であつたが、其日に第三軍は又々兵力を北に廻はさなければならぬやうになつて、咫尺を辨せざる恰も夜中の如き時に此移動を行ひ第九師團は第一師團の左に出ると云ふことになつたが、なか／＼それは困難であつた。さうして此日大石橋から軍司令部を先づ造化屯に移したが、此時は松永參謀長は軍と同行する事は最早出来なかつたのである。其内に造化屯は敵砲彈の爲に火を發した、所が此地は昨日の第九師團の戦場で屍は堆積し捕虜澤山に居り、又我負傷兵の病院があつて、それが焼けると云ふ騒ぎ、吾々も手を出してそれを片付けると云ふが如き有様で、實に慘憺たるものであつた。更に前方第一師團の方を見ると、其頃後備の二個旅團が軍に増加されたので、それを第一師團に附けて攻撃させられたが、今云ふた如く一寸先は闇と云ふ中で、優勢なる敵の逆襲を受けたので、後備某旅團の如きは、遺憾ながら敗退する事になり、又其餘波を受けた第一師團の第一線も後退しなければならぬと云ふ有様然も其後方には多くの我砲兵が砲列を敷いて居るが、一發も發射する事が出来ないで、而かも危険が迫つて來た。早く第九師團でも第一師團の左翼に出て、其急を救へば宜いがと、吾々は非常に心配をしたが、午後二時頃に至つて、唯今第九師團は豫定の如く道義屯附近に到着したが、戦闘人員は。僅に二千五百人と云ふ報告が來た此時も非常に驚いた、元來旅順の戦闘の創痍未だ癒えず、第九師團の

如きは戦闘人員八千ばかりであつたが今日はそれが二千五百人になつて仕舞つたので、實に一聯隊にも足りないのである。誠に心細き次第でありました。軍司令部は此夜は五台子と云ふ所に宿營したが、其位置は軍の左翼後で其左は曝露して仕舞つて、僅かに我騎兵旅團が遠くに居つたが、敵の優勢なる騎兵が其間に彷徨して居ると云ふ有様で、誠に危険千萬であつたが、幸い大事に至らずにすんだのである。此夜に第七師團は北陵と云ふ所に向つて夜襲を行ひ、敵の包圍を受け其隊長たる村上大佐が終に捕虜になつたのである。翌十日は前日に比して誠に快晴で、敵は大道と鐵道線路の間をドン／＼退却をするから、是を目掛けて盛んに砲彈を浴せたが、思ふやうに斃すことも出來ず、又喰止める譯にも行かなかつた。勿論第三軍が之を押詰めて行けば何でもないが、今云ふ通り各師團共多大なる死傷を出し、残り少なになつて仕舞つたので、此上の活動が不可能であるのみならず、敵は死物狂ひで鐵道線路に沿うた各部落の圍壁を守備して居るので、如何にもする事が出來ず、尙ほ時々敵は逆襲を行ふたのである。有名なる山岡中佐は此日第九師團司令部に在りて兩眼を盲したのである。斯様な有様で遺恨遂に長蛇を逸したのである。

是ぞ眞に武士の情 翌十一日は、軍は北を向つて、三個師團頭を揃へて追撃して、敵に損害を與へたが、松永參謀長は此朝を以て擔架の人となり後送された。此追撃中又妙な事があつた、それは軍司令部が前進して居ると、其道の先きに騎兵旅團が、敵の兵と戰ふて居るので、軍司令部はそれを除けて他の道を廻つて行つて、夕刻司令部が或處を前進中に其左を騎兵が同方向に進んで居る、是は或は敵の騎兵でないかと、人を派して見せると、それは我が騎兵旅團の先頭であつた、即ち軍の前方で活動すべきである騎兵旅團と、軍司令部が頭を並べて進んで居ると云ふ不思議な有様であつた。而して其日は終に遼河の稍手前まで第一線を進め

て、軍司令部は桃樹子と云ふ所に宿營したが、此夜軍司令官は私を招いて云はれるには、過る八日病中の松永を余の代りとして戦線に出した時は、予は腸を切られる様な思がした、併し前夜軍醫部長に彼の病氣の様子を尋ねたら、どうもむづかしい、と云ふとであつたから、どうか彼を疊の上で殺したくないどうか死場所を作つてやらうと思つて、誠に憐れであつたが、予の代りに戦線に出したのであると始めて其時の御心を打明けられたが、大將は遺言状にも書かれた如く、以前から死所を探して居られた程の方であるから、部下に對しても矢張り其思遣りが強いのである。而して是こそ眞の武士の情と云ふものであらうとつく／＼感じたのである。是が普通の人ならば、部下が病に罹つた場合は、大事にせよ、動くな、静養せよと云ふのであるが、それを過激の勞働を命じて、然も彈丸に中らして殺さうと云ふ考は、尋常一様の人では起らない。私は此事を想起す毎に、何時も涙に咽ぶのである。而して又松永少將も誠に吾々の敬服すべき方であると思ふのである。少將は初め第三軍の前進開始の際に、私の御願ひした事を能く心に留められて、愈々と云ふ時に其約を履まれたのである。私は此事を一の美談として後世に傳へて充分なる價值がある事と信じて居る。

其後少將は内地で静養の結果一度恢復、新設師團長となりて出征せられ、後第二師團長となられたが、朝鮮に駐劄中惜しい事には腦溢血に罹り薨去せられ、今は既に大將と共に此世に居られないのである。先づ私の話は此邊で止めて置きますが、要するに今まで述べた事は自分一個の觀察に過ぎないのであつて、なか／＼大將の如き英雄の心中は、逆も吾々凡人には測知る事は出來ないのである。而して第三軍の任務は頗るむづかしく、最も勇猛果敢に敵を攻撃しなければならぬのであるから、大將は常に危険を冒されて率先軍を指導されたのに相違なからうが、更に一方から考へれば、大將の御心中には、何等か他に宿つて居つた

ものがあつた様に吾々は想像するのである。尙奉天戦後一年間満洲に居られし間、及び凱旋後にも色々之れに類する事があつたが、それを述べるに餘り長くなるから今日は是で止めて置くが、要するに今日は乃木大将閣下對松永少將の所謂武士の情と云ふことを述べるのが、主眼であつたのである。(完)

大正六年九月一日印刷  
大正六年九月五日發行

〔非賣品〕

東京市役所内

編纂、發行所

乃

木

會

代表者 東京市牛込區赤城下町四十七番地 農 美 重 山

東京市本所區新小梅町三番地

印刷所

萬書堂印刷所

印刷者

田村奈真吉

327  
1023

[Blank paper strip]

[Blank paper strip]

終

